第十四節　戰爭

戰爭のことたる何れの時と雖もそれなきはよし。先王兵を農に寓し以て愼戒を寓す。卽ち戰爭に關するの卦を舉ぐ。

イ　☷☵　師

師は軍なり。卦象地中に水あり。兵を農に寓する所以なり。卦形、九二の陽五陰を率ひ將帥に似たるあり。其に師と名くる所以。而して多く軍のことを說く。

師貞、丈人、吉、无咎

師は貞丈人ならば吉にして、咎なし。

初六師出以律否臧凶

初六師出すに律を以てす、否らざれば臧きも凶。

九二在師、中吉、无咎、王三錫命

九二師に在りて中吉、咎なし王三たび命を錫ふ。

六三師或輿尸、凶。

六三師或は尸を輿す、凶。

六四師左次、无咎

六四師左次す、咎なし。

六五田有禽、利執言、无咎、長子帥師、弟子輿尸、貞凶

六五田に禽有り、言を執るに利し、咎なし、長子は師を帥ひ弟子は尸を輿す、貞なれども凶。

上六大君有命、開國承家、小人勿用

上六大君命有り、國を開き家を承く、小人は用ふる勿れ。

第十五節　訴　訟

訴訟は避く可らざるのと天下の訴訟するもの堯の子に行かずして舜に行き、舜の子に行かずして禹に行く。訴への道最も愼まざる可らず。

イ　☵☰　訟

訟の卦たる上天下水、天は西に動き水は東に流る。相摩するの象あり。故に名く

而して全卦多く訟訴の道を說く。訟訴するものは九二の人なり。其心剛中にして孚あり。伸る能はずして惕る。然れども訟訴は中位にして止むべし。理あるを恃むで其事を終窮す可らず。九五の大人は剛正の人なる故に就て訟ふべきも危難あるが故に之を犯して進む可らず。利見大人、不利涉大川と言ふ所以なり。

初六は柔にして下に在るもの。訟を永續するとなし。故に其の始め少く言語の爭を免れざるも、終には吉なるを得。易の訟を好まざるを見るべし。九二は剛中の人なる故勢の上に抗す可らざるを知り、歸り來る也。邑人僅かに三百戶に過ぎざる如く己を處すること寡約なるが故に災ひなし。六三は陰柔にして不中正、輕舉妄動し易し。故に其素分に安じ、貞厲なるべきを諭す。或は王事に從ふことあるも、効を已れに歸すること勿れ。九四は剛を以て陰位に居る。柔順なる者。故に訟を已めて歸り、其天命に安んず。唯其訟ふる心を渝へて貞に安んずるを可とす。九五は陽剛中正。訟へを裁判するに適す。上九は剛の極なり。理あるが故に盤帶を賜はることあるも亦忽ち之を褫はるゝに至ることあり。

訟有孚、窒惕、中吉、終凶、利見大人不利涉大川

訟は孚有り、窒かり惕る中なれば吉、終れば凶、大人を見るに利し、大川を涉るに利しからず。

初六不永所事、小有言、終吉

初六事とする所を永ふせず、小しく言あり、終に吉。

九二不克訟、歸而逋、邑人三百戶、无眚、

九二訟を克くせず、歸て逋ぐ其邑人三百戶なれば眚なし。

六三食舊德、貞厲終吉、或從王事无成

六三舊德を食む、貞厲なれば終に吉、或は王事に從ふ、成すことなし。

九四不克訟、復卽命、渝安貞、吉

九四訟を克くせず、復て命に卽く渝て安貞なれば吉。

九五訟元吉

九五訟ふる元吉。

上九或錫之盤帶、終朝三褫之

上九或は之に盤帶を錫ふ、終朝三たび之を褫はる。

第十六節　逆　境

逆境に處するは易の最も得意とする所、捲土重來は易の理想なり。逆境に處するの道を說くもの、易に甚だ多く、擧ぐる所以なり。

イ　䷂　屯

屯は音チュン「艱ム」と訓ず。卦象、水と雷、卽ち雷雨の象、又艱難の象。卦德內は動、外は陷、動いて陷るとなす。共に艱むの象あり。故に屯と名く。而して多く艱難に處するの道を說く。震が下に居る故元に亨るの理あり事業を斷行せよ。侯を建てゝ天下を治るに利しとなり。初九は困難の時に在りて微賤なりと雖も獨り陽剛の者天下を救濟すべし。磐の如く桓(柱)の如きもの、侯となるべきものなり。六二は困難の時に當りて貞操の婦人たり。初九のために婚媾を强ひらるゝ貌あれども貞にして許嫁せず、遂に其の正應九五に合するを得。屯如はなやむと遭如は徘徊することゝ。班如は還ると。初九は寇するにあらず、婚媾せんとするなり六三は女を以て陽の位に居る。不正のもの、困難の時に當り、輕擧妄動し易し。恰も虞(案內者)なくして山麓に入り、惟林中に入るのみなる如し。君子は幾を見て、早く斷念するに如かず。輕擧妄動すれば必ず利しからず。六四は困難の時に當り其分に安んず。下初九の正應あり。始めは乘馬班如たるとありと雖も遂に其應を得。九五は陽剛の天子なり。德澤を施さんとして屯むとあり。大に爲すは宜からず、小くなすは吉なり。貞とは事業をなすとなり。上六は困難の時に當り其極に居る。泣血漣如たるが如きものあり。

屯元亨利貞勿用有攸往利建侯

屯は元亨、貞に利し、往く攸あるに用ふる勿れ、侯を建つるに利し。

初九磐桓利居貞利建侯

初九は磐桓す貞に居るに利し、侯を建つるに利し。

六二屯如邅如乘馬班如匪寇婚媾女子貞不字十年乃字

六二は屯如たり、邅如たり、乘馬は班如たり、寇するに匪ずして婚媾す、女子貞なれば字せず、十年にして乃ち字す。

六三卽鹿无虞惟入于林中君子幾不如舍往吝

六三は鹿に即て虞なし、惟林中に入る君子幾す舍つるに如かず。往けば吝。

六四乘馬班如、求婚媾、往、吉无不利

六四乘馬は班如たり、婚媾を求めて往く、吉にして利からざるなし。

九五屯其膏、小貞吉、大貞凶

九五其膏を屯す小く貞なれば吉、大に貞なれば凶。

上六乘馬班如泣血漣如

上六は乘馬班如たり、泣血漣如たり。

䷋ 否

天地の氣相交通せず。萬物生せず。故に否と名く。否に處するの道を說く。人は萬物の靈長なり。故に人を以て萬物を代表せしむ。人にあらずは萬物の生生する時にあざるをいふ。君子の道を行ふの時にあらず。大即ち陽行き去りて小即ち陰來る。初六は陰柔の性にて否の時に當る。三陰と進退を共にす。(泰の初九參考)去れど其分に安んずれば吉にして亨るを得るなり。六二は中正の人なれども諸陽のために包まれて、之れに承順するもの、小人の道なり。君子の身を慎

す。其人は否なれども其道は即ち亨らざるとなきなり。六三は不中不正の者否に處するの道を失ふ。故に羞を包むといふ。九四は否の半に居る。否の漸く恢復せんとする時なり。故に天命ありといふ。其同類(疇)と共に福祉に逢ふべし。九五は陽剛の天子否を休むるものなり。大人の道なり。去れど小心翼々として人心を固結すると恰も苞桑の固結して動かすべからざるが如くなるべし。上九は否の極陽にして剛、否を傾くるの象あり。又將さに泰ならんとするの時なり。故に先きには否にして後には泰といふ。

否之匪人、不利君子貞、大往小來

否は之れ人に匪ず、君子の貞に利しからず、大往き、小來る。

初六拔茅茹、以其彙、貞吉、亨

初六茅を拔き茹す、其彙を以てす、貞なれば吉、亨る。

六二包承、小人吉、大人否、亨

六二は包承す、小人は吉、大人は否にして、亨る。

六三包羞

六三羞を包む。

九四有命、无咎、疇離祉

九四命有り咎なし、疇は祉に離る。

九五休否、大人吉、其亡其亡繫于苞桑

九五否を休む、大人は吉、其れ亡びん其れ亡びんとして苞桑に繫がる、

上九傾否、先否後喜

上九否を傾く、先には否後には喜ぶ。

八　䷖　剝

剝は削去するとにして卦體一陽上に在るのみ。陽は君子、而して削去せらる。削と名くる所以なり。小人多く、君子少し。往く所あるべからず。初六は諸陰增長の時に當りて未だ微なるもの、故に牀の足を削すといふ。禍微なりと雖も惡化せられ貞を滅すとなす。六二は削の次第に增長したるもの、故に辨(板を受くる横木)を削すとなす。貞の道を守ると能はず。凶なり。六三は獨り陽に應ずる故に聖人に親むの意あり。削の時と雖も咎なしとす。六四は削の愈々切なると膚を削するが如し。

凶とす。六五は王妃に見立てられたるもので他の四陰を以て宮女となし、王妃が此れ等を率ひて天子の寵を受けしむ。故に利からざるなしとす。上九は羣陰の盛んなる時に當りて獨り陽を以て上に居る。大なる果實の獨り食はれざる貌あり君子此位置にあれば羣陰(輿は衆)を統御するを得れども小人なれば共に削し了るべし。

削不利有攸往

削は往く攸あるに利しからず。

初六剝牀以足。蔑貞凶

初六は牀を剝くに足を以てす。貞を蔑す凶。

六二剝牀以辨、蔑凶

六二牀を剝くに辨を以てす、貞を蔑す凶。

六三剝之、无咎

六三之を剝く咎なし。

六四剝之、以膚凶

六四之を削くに疾を以てす凶。

六五貫魚以宮人寵无不利

六五貫魚に宮人の寵を以てす利しからざるなし。

上九碩果不食君子得輿小人削廬

上九は碩果食はれず君子は輿を得小人は廬を削く。

二 ䷜ 坎

此卦上下共に坎故に名あり。而して今艱難に處するの道を說く。

習坎有孚維心亨行有尙

習坎は孚有り維れ心亨る行けば尙ふこと有り。

初六習坎入于穴凶

初六習坎穴に入る凶なり。

九二坎險求小得

九二坎に險有り求むること小しく得たり。

六三來之坎々險且枕入于穴勿用

六三來之坎々たり險且枕す穴に入る用ゆること勿れ。

六四樽酒簋貳用缶納約自牖終无咎

六四樽酒簋あり貳に缶を用ゆ約を納ること牖よりす終に咎なし。

九五坎不盈祇既平无咎

九五祇に盈たず既に平かなり咎なし。

上六係用徽纆寘于叢棘三歲不得凶

上六係ぐに徽纆を用て叢棘に寘く三歲得ず凶なり。

ホ ䷣ 明夷

明夷は明傷るなり。卦象離火坤地の中に入る故に名く。全卦多くは明傷るに處するの道を說く。

明夷利艱貞

明夷は艱貞に利し。

初九明夷于飛雖其翼君子于行三日不食有攸往主人有言

初九明夷る于に飛で其翼を垂る君子于に行て三日食せず往く所あり主人

言あり。

六二明夷、々于左股、用拯馬壯、吉

六二明夷、左股に夷る、用て拯馬壯なり、吉。

九三明夷于南狩、得其大首、不可疾貞

九三明南狩に夷る。其大首を得、疾く貞にす可らず。

六四入于左腹、獲明夷之心于出門庭

六四左腹に入る、明夷の心を獲たり、門庭を出るに于てす。

六五箕子之明夷。利貞

六五箕子之明夷る。貞に利あり。

上六不明晦。初登于天。後入于地。

上六明ならずして晦し初は天に登り、後には地に入る。

䷾ 睽

乖離なり。卦象火上、澤下、火は炎上し澤は瀾下す。乖離の意あり。故に名く。全卦多くは乖離の際に於る處世法を說く。

火は燥し、澤は濕ふ。上下相和せず、故に睽といふ。睽とは反くなり。故に多く睽に處するの道をいふ。

睽小事、吉

睽は小事に吉なり。

初九、悔亡、喪馬、勿逐、自復、見惡人、无咎

初九悔亡ぶ、馬を喪ふ、逐こと勿れ、自から復る、惡人を見れば咎なし。

九二遇主于巷、无咎

九二主に巷に遇ふ、咎なし。

六三見輿曳其牛、掣其人、天且劓、无初有終

六三輿曳を見る、其牛其人を掣す。天きられ且つ劓さる。初めなくして終りあり。

九四睽孤、遇元夫、交孚、厲无咎

九四睽孤なり、元夫に遇ば交り孚あり、厲けれども咎なし。

六五悔亡、厥宗噬膚何睽

六五悔亡ぶ、厥宗膚を噬む往けば何の咎あらん。

上九睽孤、見豕負塗、載鬼一車先張之弧後說之弧、匪寇婚媾往吉雨則吉

上九て孤なり、豕の塗に負て鬼を載ること一車なるを見る、先には之が弧を張り後には之が弧を說く、寇するに匪ず、婚媾せん、往き雨に遇へば卽ち吉なり。

ト ䷦ 蹇

蹇は難なり、足進む能はざる意なり、卦德外險にして內止る、險に遇ふて止る意あり、故に名く、全卦多くは蹇難のことを說く。

蹇利西南、不利東北、利見大人、貞吉

蹇は西南に利あり、東北に利あらず、大人を見るに利あり、貞にして吉なり。

初六往蹇來譽

初六往けば蹇來れば譽あり。

六二王臣蹇々、匪躬之故

六二王臣蹇々たり、躬之故に匪ず。

九三往蹇來反

九三往けば蹇み來れば反る。

六四往蹇來連

六四往けば蹇み來れば連なる。

六五大蹇朋來

六五大に蹇み、朋來る。

上六往明來碩吉利見大人

上六往けば蹇み、來れば碩なり、吉なり、大人を見るに利あり。

チ ䷮ 困

困は窮躬の意なり、彖傳に據れば九二、九四、九五九に陰の爲めに蔽はるゝが故に困と名く、故に多く困厄に處するの道を說く。

困亨貞大人吉无咎有言不信

困は亨る、貞、大人は吉なり、咎なし、言有り信せられず。

初六臀困株木入于幽谷三歲不覿

初六臀株木に困しむ、幽谷に入る、三歳覿ず。

九二困于酒食、朱紱方來、利用亨祀、征凶无咎

九二酒食に困しむ、朱紱方に來る、亨祀を用ゆるに利し、征ば凶、咎なし。

六三困于石、據于蒺藜、入于其宮、不見其妻、凶

六三石に困しみ、蒺藜に據る、其宮に入り、其妻を見ず、凶なり。

九四來徐々、困于金車、吝有終

九四來ること徐々たり、金車に困しむ、吝なれども終り有り。

九五劓刖、困于赤紱、乃徐有說、利用祭祀、

九五劓刖、赤紱に困しむ、乃ち徐やく說ぶこと有り、祭祀を用ゆるに利し。

上六困于葛藟、于臲卼、曰動悔、有悔、征吉

上六葛藟に臲卼に困しむ、曰に動て悔ゆ、悔ること有り、征けば吉なり。

䷽ 小過

小過は小なる者過るなり。二陽四陰、陰を小となす。故に名く。而して多く逆境に處するの道を說く。

小過亨、利貞、可小事、不可大事、飛鳥遺之音、不宜上、宜下、大吉

小過は亨る、貞に利あり、小事に可なり、大事に可ならず、飛鳥之が音を遺す、上るに宜しからず、下るに宜し、大吉なり。

初六飛鳥以凶

初六飛鳥以て凶なり。

六二過其祖、遇其妣、不及其君、遇其臣、无咎

六二其祖を過ぎて其妣に遇ふ、其君に及ばず、其臣に遇ふ、咎なし。

九三弗遇防之、從或戕之、凶

九三之を防ぐに過ぎず、從て或は之を戕ふ、凶なり。

九四无咎、過遇之、往厲、必戒、勿用永貞

九四は咎なし、之に遇ふに過ぎず、往けば厲し、必ず戒めて永貞を用ふる勿れ。

九五密雲不雨、自我西郊、公弋取彼在穴、

九五密雲雨らず、我西郊よりす、公弋して彼の穴に在るを取る。

上六弗遇過之、飛鳥離之凶、是謂災眚

上六過はずして之に過る、飛鳥之に離る、凶なり、是を災眚と謂ふ。

又 ䷾ 未濟

未濟とは未だ用をなさゞるなり。火上に在りて水下に在り。上下交らず。用を濟さゞる所以なり。故に逆境となす。

未濟亨、小狐汔濟濡其尾、无攸利

未濟は亨る、小狐汔んど濟る、其尾を濡す、利する攸なし。

初六濡其尾、吝

初六其尾を濡す、吝。

九二曳其輪、貞吉

九二其輪を曳く、貞なれば吉。

六三未濟征凶、利涉大川

六三未濟征けば凶、大川を涉るに利し。

九四貞吉、悔亡、震用伐鬼方、三年、有賞于大國

九四貞なれば吉、悔亡ぶ、震用つて鬼方を伐つ、三年大國に賞有り。

六五貞吉、无悔、君子之光、有孚、吉

六五貞なれば吉、悔なし、君子の光り孚あり吉。

上九有孚于飲酒、无咎、濡其首、有孚、失是

上九飲酒に孚有り、咎なし、其首を濡す孚有り是を失ふ。

第十七節　進退

進退は乃ち處世なり。然りと雖も又多少の異なる所あり。進むが是か退くか否か適として之を敎へるもの之を進退といふ、列する所以なり。

看 ䷀ 乾

此卦は上下共に乾故に乾と名く。卦の性質は最も宜し。故に元亨利貞と曰ふ。潛龍より以上飛龍に至る迄各其位に當りて其取るべき所の方針あり。然れども亢龍は則ち必す悔あるべき者。初九は潛龍の位置なり。未だ用ふべきの時にあらず。九二は大に見はる。恰も見龍の田に在るが如し。九五の大人を見て之を行ふに宜し。九三は其位置漸く高きが故に戒慎恐懼すべし。則ち危しと雖も咎なし。九三

善く此任に堪ふ。九四は剛を以て柔に居る。剛柔其宜きを得。故に活動すると其宜きを得。九五は剛中正の人君飛龍の天に在る如し。九二の大人を見て之を用ふるに利し。上九は陽の極、之を譬ふれば亢龍の悔ある如し。用九とは陽の德を應用するといふ意なり。陽即ち乾の德を應用せんとするものは群龍の首なきが如くすべしとなり陽に戒する所は其の亢ぶらずして謙遜するに在り。

乾元亨利貞

乾は元に亨る、貞に利し。

初九潛龍勿用

初九潛龍用ふる勿れ。

九二見龍在田、利見大人

九二見龍田に在り、大人を見るに利し。

九三君子終日乾々、夕惕若、厲无咎

九三君子終日乾々在り、夕まで惕若たれば厲けれども咎なし。

九四或躍在淵、无咎

九四或は躍つて淵に在るも咎なし。

九五飛龍在天、利見大人

九五飛龍天に在り、大人を見るに利し。

上九无龍有悔

上九は无龍悔あり。

用九見羣龍无首吉

用九は羣龍の首なきを見るなり。

䷁ 坤

此卦上下共に坤、故に名けて坤と曰ふ。坤は婦人の德なり。貞順是れなり。君子此德を體する者、須らく牝馬の貞順にして重きに堪ふるが如くなるべし。婦人は男子に伴ひ、臣は君に從ふべき者貞順に戒むる所は阿附に在り、朋黨に在り永く之を維持し得ざるに在り。先づ之を明かにす。坤は婦人の德なる故に易に在りては惡き意味ありとなし此惡き方面のみを觀察して以て坤卦の辭を爲せり。初六は實に始めての陰なり。之を戒むる切なる所以なり。六二は柔を以て陰に居り、且つ

中を得。坤の美德を遺憾なく發揮したる者六三は柔を以て陽位に居る。妄擧輕動の嫌ひあり。故に得て之を戒む。柔を以て陽位に居る。故に章を含むといふ。而して貞正にすべく、且つ王事に從ふて功あるも之を君主に歸するが如くすべきをいふ。六四は柔を以て陰位に居るもの。故に過柔の性。恰も囊口を括して咎譽の言ふべきなき如し。六五は柔を以て陽位に居るの君主。中に美德を含む恰も黃裳の美次第に外に見はるゝ如し。上六は陰にして高きに過ぐるもの、必ず陽と爭ふ。龍戰于野」といふ所以、用六は易の陰を應用するを言ふ戒むる所は氷く貞を守るに在り。

坤元亨利牝馬之貞、君子有攸往、先迷後得主利西南得朋、東北喪朋安貞吉。

坤は元に亨る、牝馬の貞に利し、君子往く所有り、先づときは迷て後るゝときは主を得、西南朋を得、東北朋を喪ふに判し、貞に安んずれば吉。

初六履霜堅氷至

初六霜を履むで堅氷至る。

六二直方大不習无不利

六二直方大なり、習はずして利からざるなし。

六三含章、可貞、或從王事、无成有終

六三章を含んで貞にす可し、或は王事に從ふ、成すことなければ終り有り。

六四括囊、无咎无譽

六四囊を括す、咎なく譽なし。

六五黃裳元吉

六五黃裳元吉、

上六龍戰于野、其血玄黃

上六は龍野に戰ふ、其血玄黃なり。

用六利永貞

用六は永貞に利し。

八　履

履は禮と訓す。古音相通ずるなり。又履踐の意あり。卦象天上澤下、上下尊卑の分明かなり。禮の意あり。六三一陰を以て三陽の後に接す。其危きこと虎尾を履むに似

たり。故に言ふと然り。此卦多くは危地に於る實踐處世の道を說く。

初九は其集に安んじ居るが如し。此くの如くして往く時は咎なし。九二は剛中にして上に正應なし。其志獨行に在り。故に坦々の道を行くが如し。卽ち出人の貞なるものなり。六三は不中不正、輕舉妄動し易き者。恰も眇者の見んとして僅かに視、跛者の歩まんとして僅かに歩むが如し。其危きこと虎尾を履むに似たり。傷害せらるゝに至る。陰と雖も侮る可らざると武人の大名になる如し。而かも其終を保つ可らず。九四は謹むを知るの人。虎尾を履むが如く危しと雖も愬々として恐るゝことを知るが故に終に吉なるを得。九五は陽剛中正の君、而かも履の時に當るが故に果斷に過るの意あり。之を「夫履」と曰ふ。貞なれども厲き所以なり。

履虎尾、不咥人、亨

虎の尾を履む、人を咥はず、亨る。

初九、素履、往、无咎

初九素履す、往けば咎なし。

九二履道坦々、幽人貞吉

九二道を履む坦々たり、幽人貞なれば吉。

六三眇能視、跛能履、履虎尾、咥人凶、武人爲于大君

六三眇能く見、跛能く履む、虎の尾を履む、人を咥ふ、凶、武人大君と爲る。

九四履虎尾、愬々、終吉

九四虎尾を履むこと愬々たり、終に吉。

九五夬貞、厲

九五夬して履む貞なれども厲し。

上九視履考祥、其旋元吉

上九履を視て祥を考ふ、其れ旋れば元吉なり。

䷭ 升

升は進なり。彖傳に據れば此を升と名けし所以は三陰上に升りしを以てなり。此卦多くは升進を主として處世の道を論す。九二と六五とを主として之を考ふるに九二は巽順の體に居りて六五の人君に逢ふ。恤ふると勿れ。大に進んで爲すあるべきなり。

初六は巽順の主體たり。躬に此德を體して以て上升せんとす。大に吉なる所以なり。九二は陽剛にして中に居る。心に孚あるもの。六五に仕ふる須らく儉朴を事とすべし。乃ち咎なきを得るなり。九三は過剛の嫌あれども時や升なる故、升るに良き者。故に虛邑に升るの象あり。九四は陽を以て陰位に居る。順にして正きを得、而して天下之に歸するの象あり。恰も文主の岐山に亨して周の盛大を致せしが如し。六五は其位正からず故に貞なれば吉なり。唯當さに九二の賢人の補助を得て完かるべし。恰も高きものゝ階に升るが如し。上六は陰を以て上の極に居る。進むを知つて退くを知らず。昏冥にして升るなり不可なりと雖も其の心を貞にして息まざる時は卽ち可なりと曰ふなり。

升元亨用見大人、勿恤、南征吉

升は元に亨る、大人を見るに用ふ、恤ふる勿れ、南征して吉なり。

初六允升大吉

初六允升す大吉なり。

九二孚乃利用禴、无咎

九二孚あり乃ち禴を用ふるに利し、咎なし。

九三升虛邑

九三は虛邑に升る。

六四王用亨于岐山、吉无咎

六四王用つて岐山に亨す、吉にして咎なし。

六五貞吉升階

六五貞なれば吉、階に升る。

上六冥升、利于不息之貞

上六冥升、利于不息之貞

艮

☶☶

此卦上下共に艮、故に名けて艮と曰ふ。艮は止まる意。故に全卦人の方さに止まる所に付て其善惡を論ず。其背に艮て其身を獲ざるは其身を私せざるなり。其處に行て其人を見ざるは人我の見なきなり。此の如くして廓然大公、物來りて順應し、動て動くとなく、靜かにして靜かなるとなし。初六は陰柔にして低きに止まる。

咎なき所以、只だ其永く然るべきを戒む。趾は最下を云ふ。六二は陰柔中正、九三の剛を承けて之に從ふ。九三は過剛の人、來り拯ふとなし。情意の相投せざる如何する能はず其心快からざるあり。恰も九三の爲す所に隨ふのみ。恰も腓の足に從て動くが如し。九三は過剛不中にして下の上に止まる。是れ自ら是とするもの、上下阻隔す。而して其心を篤するに至る。其限に艮まるとは腰に止まるの意、身體の中部を言ふなり。六四は柔を以て陰位に居る。其止る處に止る。咎なき所以なり。六五は其陽位に居るは悔あるべきが如くなれども柔中なるが故に悔亡ぶるを得。艮に口の象あり故に艮其輔と曰ふ上九は陽剛を以て終りに居る。其止るや其處を得。艮るに敦しといふ所以なり。吉是れより大なるなし。

艮其背、不獲其身、行其庭、不見其人、无咎

其背に艮る、其身を獲ず其庭に行いて其人を見ず、咎なし。

初六艮其趾、无咎、利永貞

初六は其趾に艮る咎なし、永貞に利し。

六二艮其腓、不拯其隨、其心不快

六二其腓に艮る拯かならざれば其れ隨ふ、其心快からず。

九三艮其限、列其夤、厲、薰、心

九三其限に艮る、其夤に列す、厲しければ心に薰す。

六四艮其身、无咎

六四其身に艮る咎なし。

六五艮其輔、言有序、悔亡

六五其輔に艮る言に序あり、悔亡ぶ。

上九敦艮吉

上九は艮るに敦し、吉。

䷴ 漸

漸は進むの意、卦象長女少男の上に在り。漸を以て進むの意あり。卦德止まりて柔順なり。俄かに進まざる貌。故に漸と名け。人間進退の道を說けり。長女を以て少男の上に居る。正しき道なり。正しき道の女は嫁して吉を得。初六は進むの微なる者。故に于(水涯)に進むといふ。小子の如きものゝ進むと故危くして言葉の禍あさ

ども本來微なる故に咎なきを得。六二は中正の爻なり。故に鴻の磐に上り居るの感あり。中正の道を以て進むるが故に飲食を和樂するを得。衎々は樂む貌。九三は過剛不中の人、之を以て進む。其宜きを得ざるは固よりなり。鴻は水鳥なり。陸を行くは道にあらず。夫は外に征いて歸來せず。婦は孕んでも育することを知らざる如し。凶なる所以なり。去れど過剛の人故寇を禦ぐに宜しとなす。六四は柔順の人、進むこと少し。故に其位置は高くして鴻の木に止まりしが如くなるも桷(横平の枝)を得て安んずることもあるべし。九五は陽剛の君下二に應ず。三四のために阻まる。故に三歲孕まずといふ。去れど終に二五の正しき應爻に勝つ能はず。吉なるを得。上九は陽剛を以て大に進めるもの、鴻の逵(雲井)に飛ぶの觀あり。聖人の其一身を善くするものなり。其羽を以て儀標となすべし。吉なる所以なり。

漸、女歸吉、利貞

漸は女歸いで吉なり、貞に利し。

初六鴻漸于干、小子厲有言、无咎

初六鴻漸于干に漸す、小子厲くして言有るも咎なし。

六二鴻漸于磐飲食衎々、吉

六二鴻磐に漸す、飲食衎々たれば吉。

九三鴻漸于陸、夫征不復、婦孕不育、凶、利禦寇

九三鴻陸に漸す、夫征して復らず、婦孕どもば育まず、凶なり、寇を禦ぐに利し。

六四鴻漸于木、或得其桷、无咎

六四鴻木に漸す、或は其桷を得、咎なし。

九五鴻漸于陵、婦三歲不孕、終莫之勝、吉

九五鴻陵に漸す、婦三歲孕まず、終に之に勝る莫し、吉。

上九鴻漸于陸、其羽可用爲儀、吉

上九鴻陸に漸す、其羽用て儀と爲す可し、吉。

卜　中孚

此卦は中に二陰あり、己れを虛ふして人を感ずる所以を說く。

中孚豚魚吉利涉大川利貞

中孚は豚魚吉、大川を涉るに利し貞に利し。

初九虞吉、有他不燕

初九虞なれば吉、他有れば燕せず。

九二鳴鶴在陰、其子和之、我有好爵、吾與爾靡之

九二鳴鶴陰に在り、其子之に和す、我に好爵有り、吾と爾と之を靡す。

六三得敵、或鼓或罷、或泣或歌

六三敵を得て或は鼓し、或は罷め、或は泣き、或は歌ふ。

六四幾望、馬匹亡、无咎

六四望に幾し馬匹亡ぶれば咎なし。

九五有孚攣如、无咎

九五孚有り攣如たれば咎なし。

上九翰音登于天、貞凶

上九翰音天に登る、貞なれば凶。

十　䷝ 離

上下共に離故に名あり。而して多く進退の理を說く。

離利貞亨畜牝牛吉

離は貞に利し亨る。牝牛を畜ふ吉なり。

初九履錯然、敬之、无咎

初九履こと錯然たり、之を敬すれば咎なし。

六二黃離元吉

六二黃離元吉

九三日昃之離、不鼓缶而歌、則大耋之嗟、凶

九三日昃の離、缶を鼓して而して歌はざれば則ち大耋の嗟あらん、凶なり。

九四突如、其來如、焚如、死如、棄如

九四突如として其れ來如たり、焚如たり、死如たり、棄如たり。

六五出涕沱若、戚嗟若、吉

六五涕を出すこと沱如たり、戚むこと嗟如たれば吉なり。

上九王用出征、有嘉、折首獲匪其醜、无咎

上九王用つて出て征す、嘉こと有り、首を折て獲ること其醜に匪ず、咎なし。

第十八節　社會救濟

古代公德の進歩せざる時と雖も一般に他人に對する人情の存在せしことは疑ふ可らず。乃ち今之れに類する者を擧げて以て古人の思想の一般を見んと欲す。

イ　䷯　井

此卦は下を入となし、上を水となす。井の象なり。井は人を養ふ所以、故に多く人を養ふの義を取る。

井、改邑不改井、无喪、无得、往來井井、至、亦未繘井、羸其瓶、凶

井は邑を改め、井を改めざれば喪ふなく得るなし、往來井を井とし、訖んど至るも、亦未だ井を繘せず、其瓶を羸、凶なり。

初六井泥、不食、舊井无禽

初六井泥して食はず舊井に禽なし。

九二井、谷射鮒、甕敝漏

九二井谷、鮒を射る、甕敝れて漏る。

九三井渫不食、爲我心惻、可用汲、王明並受其福、

九三井渫して食はず、我心の惻を爲す、用て汲む可し、王明かに並び其福を受く、

六四井甃、无咎、

六四井甃、无咎なし、

九五井洌、寒泉食、

九五井洌にして寒泉食ふ。

上六井收勿幕、有孚、元吉

上六井收めて幕するかなれ孚有れば元に吉なり。

ロ　䷰　革

此卦、上を澤となし下を火となす。上下互に相ひ克せんとす。革の意あり。故に多く改革のことをいふ。

革巳日乃孚、元亨、利貞、悔亡

革已むる日孚あり。元に亨る、貞に利し悔亡ぶ

初九鞏用黄牛之革

初、九鞏は黄牛の革を以てす。

六二已日乃革之、征吉、无咎

六二已る日乃ち之を革す征けば吉、咎なし。

九三征凶、貞厲、革言三就、有孚

九三征けば凶なり、貞なれば厲し、言を革する三就孚有り。

九四悔亡、有孚、改命吉

九四悔亡ぶ、命を改むるに孚有れば、吉。

九五大人虎變、未占有孚

九五大人は虎變す、未だ占はずして孚有り。

上六君子豹變、小人革面、征凶、居貞、吉

上六君子は豹變す、小人は面を革む、征けば凶、貞に居れば吉。

八　䷱　鼎

此卦は其形鼎に似たり、下一陰は足、中三陽は胴、五一陰は耳、上一陽は鈎に似たり。鼎は人を食ふ所以、故に多く養ふの意をいふ。

鼎元亨

鼎は元に亨る。

悔六、鼎顛趾、利出否、得妾以其子、无咎

初六鼎は趾を顛し、否を出すに利し、妾を得、其子を以てす、咎無し。

九二鼎有實、我仇有疾、不我能卽吉

九二鼎實あり、我仇疾有り、我に卽する能はず、吉。

九三鼎耳革、其行塞、雉膏不食、方雨、虧悔、終吉

九三鼎耳革る、其行塞る、雉膏あれども食はず、雨ふらんとして悔を虧く、終に吉。

九四鼎折足、覆公餗、其形渥、凶

鼎足を折り、公の餗を覆へす、其形渥たり、凶。

六五鼎黄耳金鉉、利貞

六五鼎黄耳、金鉉、貞に利し

上九鼎玉鉉大吉、无不利

上九鼎玉鉉、大吉利しからざるなし。

第十九節　努　力

努力の人生に於るや大なり。列する所以なり。

イ ䷢ 晉

火地上に見はるを晉となす。晉は進なり。進む所以の者、最も注意せざる可らず。

晉康侯、用錫馬、蕃庶、晝日三接

晉康侯用て馬を錫ふ、蕃庶なり、晝日に三たび接す。

初六晉如、摧如、貞吉、罔孚、裕、无咎

初六晉如たり、摧如たり、貞なれば吉なり、孚とせらるゝことと罔し、裕なれば咎なし。

六二晉如、愁如、貞吉、受茲介福于其王母

六二晉如たり、愁如たり、貞なれば吉なり、茲の介なる福を其王母に受く

六三衆允、悔亡

六三衆允にす、悔亡ふ。

九四、晉如鼫鼠、貞厲

九四晉こと鼫鼠の如し、貞なれとも厲し、

六五悔亡、失得勿恤、往吉、无不利

六五悔亡ふ、失得は恤ることと勿れ、往ば吉なり利せざることなし。

上九晉其角、維用伐邑、厲吉、无咎、貞吝

上九晉其角を晉む維用て邑を伐ときは厲けれども吉、咎なし、貞なれば吝なり。

ロ ䷡ 大壯

陽漸く進む。其勢大壯となす。壯んなるに道あり。列する所以なり。

大壯利貞

大壯貞に利し。

初九壯于趾、往凶、有孚

初九趾に壯なり、往けば凶なり、孚有り。

九二往吉

九二往吉。

九三小人用壯、君子用罔、貞厲、羝羊觸藩、羸其角

九三小人は壯を用ゆ、君子は罔を用ゆ、貞なれば厲し、羝羊藩に觸れて、其角を羸しむ。

九四貞吉、悔亡、藩亡、藩決、不羸、壯于大輿之輹

九四貞吉、悔亡ぶ、藩決て羸しません、大輿の輹に壯なり。

六五喪羊于易、无悔

六五羊を易に喪ふ、悔なし。

上九羝羊觸藩、不能遂、无攸利、艱則吉

上九羝羊藩に觸れて、遂むこと能はず、利する攸なし、艱なれば則ち吉なり。

第二十節　修養

修養は處世の要諦なり。先王修養の法に於て最も力を盡くす。

䷓ 觀

此卦は二陽上に在り四陰下に在り、四陰二陽を觀望す、故に多く觀の意をいふ。

列する所以なり。

觀盥而不薦、有孚顒若

觀は盥して而して薦せず、孚有りし顒若たり。

初六童觀、小人无咎、君子吝

初六童觀す、小人は咎なし、君子は吝なり。

六二闚觀、利女貞

六二闚觀す女の貞なるに利し。

六三觀我生、進退

六三我生を觀て進退す。

六四觀國之光、利用賓于王

六四之光を觀る王に賓たるに用ゆるに利し。

九五觀我生君子无咎

九五我生を觀る、君子は咎なし。

上九觀其生君子无咎

上九其生を觀る、君子は咎なし。

☳☳ 震

上下共に震故に名あり。各爻震ふの意あり、故に多く震動の意をいふ。

震亨、震來虩々後笑言啞々、震驚百里不喪匕鬯

震は亨る震來つて虩々たり、後には笑言啞々たり、震百里を驚かす、匕鬯を喪はず。

初九震來虩々、後笑言啞々、吉

初九震來つて虩々たり、後には笑言啞々たり吉。

六二震來厲億喪貝躋于九陵、勿逐、七日得

六二震來りて厲し、貝を喪ふを億ふ、九陵に躋る、逐ふこと勿れ、七日にして得ん。

六三震蘇々、震行无眚

六三震蘇々たり、震行けば眚なし。

九四震遂泥

九四震遂に泥す。

六五震往來厲、億无喪有事

六五震往來すれば厲し事有るを喪ふ无し。

上六震索々視矍々征凶震不于其躬于其鄰无咎婚媾有言

上六震は索々として視、矍々として征すれば凶、震其躬に于てせず其隣に于てすれば咎无し。婚媾には言有り。

八 ☴☴ 巽

上下共に巽故に名あり。

巽小亨、利有攸往、利見大人

巽は小しく亨る、往く所あるに利し、大人を見るに利し。

初六進退利武人之貞

初六進退は武人の貞に利し。

九二巽在牀下、用史巫、紛若、吉、无咎

九二巽は牀下に在り史巫を用う紛若たり吉にして咎无し。

九三頻巽吝

九三頻りに巽す吝なり。

六四悔亡、田獲三品

六四悔亡ぶ、田して三品を獲。

九五貞吉、悔亡、无不利、无初有終、先庚三日、後庚三日、吉

九五貞なれば吉にして悔亡ぶ利からざる无し、初め无くして終り有り、庚に先つ三日、庚に後るゝ三日、吉なり。

上九巽在牀下、喪其資斧、貞凶

上九巽牀下に在り、其資斧を失ふ、貞なれども凶。

二　䷗　復

復は恢復の意。一陽下に來復せるが故に名く。而して元氣恢復の意を說く。列する所以なり。

復、亨、出入有疾、朋來无咎、反復其道、七日來復、利有攸往

復は亨る、出入疾なし、朋來る、咎なし、反復其れ道す、七日にして來復す往く攸有るに利し。

初九、不遠復、无祇悔、元吉

初九遠からずして復る悔に祇ることなし、元吉なり。

六二休復、吉

六二休復す吉なり。

六三頻復、厲无咎

六三頻に復る、厲きも咎なし。

六四中行、獨復

六四中行獨り復る。

六五敦復无悔

六五敦復す、悔なし。

上六迷復、凶有災眚、用行師、終有大敗、以其國君、凶、至于十年不克征

上六復に迷ふ、凶、災眚有り、用て師を行る、終に大敗有り、其國君を以て凶、十年に至るも征することを克はず。

ホ ䷟ 恆

此卦巽にして動く、故に能く恆なるべしとなす。孔子曰はく、吾れ未だ恆あるものを見ずと。孟子曰はく恆心と、恒の大なるを見るべし。列する所以なり。

恒亨、无咎、利貞、利有攸往

恒亨る、咎なし、貞に利し、往く攸有るに利し。

初六、浚恒、貞凶、无攸利

初六恒に浚し、貞なれども凶なり、利する攸なし。

九二悔亡、

九二悔亡ぶ。

九三不恒其德、或承之羞、貞吝

九三其德を恒にせず、或は之が羞を承く、貞なれども吝。

九四田无禽

九四田に禽なし。

六五恒其德、貞、婦人吉、夫子凶

六五其德を恒にす、貞なり、婦人は吉なり、夫子は凶なり。

上六振恒凶

上六振て恒にす凶。

ヘ ䷄ 需

需は待つの意。卦象、天上に水あり。雨ふらんとするの象。雨を待つの意あり。故に名く。而して多く期待の意を說く。內に陽剛の德を懷きて困難に逢ふ。孚あるもの故に大に亨るを得べし大川を涉るに利し。凡て大川を涉るは事業を敢行するをいふ。初九は猶困難に遠し。郊(野外曠遠の地)に需つの意あり。恒を用ひ妄動なきを要す。左すれば咎なしとなす。九二は少しく困難に近く、其の形沙に需つが如く、小く言語の禍ありと雖も終に吉なるを得。九三は愈近く而して過剛不中の人物、終に寇害の至るを致すとなり。六四は最も難に近きて血傷せらるゝが如しと雖も

柔順なるもの故其活路を發見するを得べしとなり。穴より出づといふ所以なり。

九五は陽剛の天子なれども時や需なり。故に酒食して何等なすなく以て時機の到來を待つべし。卽ち吉なるを得、上六は險難の極に居る故に穴に入るの象あり。殊に下三陽の進み來るあり。唯だ隱忍して之を敬し、僅かに其災を免るゝを得るのみ。

需有孚、光亨、貞吉、利涉大川

需は孚有りて光り亨る貞吉なり。大川を涉るに利あり。

初九需于郊、利用恒、无咎

初九郊に需つ恒を用ゆるに利あり、咎なし。

九二需于沙、小有言、終吉

九二沙に需つ、少しく言有り、終に吉なり。

九三需于泥、致寇至

九三泥に需つ寇の至るを致す。

六四需于血、出自穴

六四血に需つ穴より出づ。

九五需于酒食、貞吉

九五酒食に需つ、貞吉

上六入于穴、有不速客三人來、敬之、終吉

上六穴に入る、速かざるの客三人來るあり、之を敬すれば終に吉なり。

第二十一節　六十四卦分類表

今列擧したる所を表示すれば左の如し。表の順序は必ずしも拘泥せず。

處世、謙、賁、遯、无妄、萃、願、節、大過、損、益、
順境、夬、大有、豫、解、泰、豐、兌、漁、旣濟、臨、
愛撫　比
交際　同人、隨、咸、姤、
敎育　蒙
家庭　蠱、家人、

結婚　歸妹
旅行　旅
牽制　小畜、大畜
刑罰　噬嗑
戰爭　師
訴訟　訟
逆境　屯、否、剝、習坎、明夷、睽、蹇、困、小過、未濟、
進退　乾、坤、履、升、艮、漸、中孚、離、
社會救濟　井、革、鼎、
努力　晉、大壯、
修養　觀、震、復、巽、恒、需、

表の順序は必ずしも拘泥せず。以上列擧する所は余自身意に滿たざる所少からず。何んとなれば卦辭と爻辭とは全然其の趣きを異にするものなり。例へば噬嗑の象は獄を析くをいへども、爻辭は之れに及ばざる如し。或は一卦の中種々の意義を包含し何れに屬せしめて可なるや明かならざるものあり。結婚のことは歸妹一卦に限るにあらず。他の卦の爻辭にも多く之を發見するを得るなり。乃ち余が分類の不完全なることは余自身之を認む。且つ處世と修養と如何に相ひ異なるか。易六十四卦三百八十四爻全體が既に處世にあらざるか、處世と修養と如何に區別すべきか。乃ち此等の疑問は何人の腦中にも多く起る所なるべく、而して余自身亦嘗て爻辭を卦辭より離して以て一種の分類をなせり。今列擧せる所と大同なりと雖も小異の寧ろ注意すべきものあり。乃ち左に列擧す。若し之を取りて以て前の分類を見る時は猶又其の不完全なるものあるを知るべし。

▲處世　謙、遯、賁、无妄、萃、上六　頤、節、大過、損、益、上九　鼎、離、初九　六二　九三
▲順境　泰、(時勢)　大有、豫、解、益、夬、晉、兌、渙、既濟、
▲愛撫　比、臨、大畜、六五　姤、九五　萃、九四　九五　離、上九　六五
▲交際　同人、隨、大畜、九三　咸、損、六三　姤、離、九四
▲教育　蒙
▲家庭　小畜、九三　上九　蠱、剝、家人、漸、九三

▲結婚　蒙、九二九三　泰、六五　睽、上九　歸妹、姤、漸、
▲旅行　旅、
▲牽制　小畜、大畜、
▲刑罰　噬嗑、
▲戰爭　師、
▲訴訟　訟
▲逆境　屯、需、否、剝、習坎、明夷、睽、蹇、困、小過、未濟、
▲進退　乾、坤、履、泰、初九九二　升、艮、漸、中孚、
▲社會救濟　井、革、鼎、六五上九
▲努力　晉、大壯、
▲修養　觀、震、復、巽、恒、升、六五　井、

余は分類の精緻ならんことを期せず。如何んとなれば六十四卦の性質として三百八十四爻との關係上、到底精緻なる分類を許すことなければなり。然りと雖も、六十四卦の意味を理解し、之をして一目瞭然たらしめんには、人生を其方面より觀察して、六十四卦を之れに配當するものとして解釋するの外なきなり。然らざれば六十四卦の意味は到底近世的に解釋せらるべからざるなり。分類の精密は期す可らず。但だ其の精神を取る可なり

第二十二節　易の文

易の經文の解し難きは第一編に於て述べたる如く、又本章引ける六十四卦を見れば明かなり。易の文章は如何樣にも解釋することを得るもの多し。例へば

貞凶
貞吉

などの句は至る處に發見せらるれど之を以て「貞なれば凶」と讀むべく貞なれども凶とも讀むべし。如何樣にも之を解釋し得べきもの少からず。又貞吉も同じく「貞なれば吉」とも「貞にして吉」とも讀むべし。之を一定せんとしても殆んど自己の見る所を以てするのみ。故に余は多く之れに拘泥せざるなり。又利の字も「利す」とも讀むべく「利し」とも讀むべし。何れにても文意に害なし。是れ亦拘泥せず。其他

初九は潛龍用ふる勿れ」といふか「初九潛龍用ふる勿れ」といふか、二者單に慣習の異なるにあるのみ。故に又拘泥せざるなり。要するに易の文章は極めて解し難く、且つ緩慢にして、多種多樣の意味をも發見するを得べきなり。殊に卦名の原因に就いては象は多く剛柔來往を以て義を取れども其外に卦德と卦象とは大に參考とせざる可らざるなり。而して其名も亦決して之れ以外に附す可らざるにあらず。䷝風火を家人と言ひながら䷤を睽といふは義に於て一貫せざるなり。長女と中女との集合と中女と少女との集合、何の異なる所かある。易を說くものは易の道は變通自在端睨すべからざるものと稱すれども決して然るにはあらざるなり。其他卦名の因りて起る所、到底解釋す可らざるもの多し。但だ起りしなど思はるゝ點を發見すれば其れにて滿足せんのみ。

第二十三節　上下經の八卦數

上下經に於る八卦の數は左の如し。

上經

乾	一二	四	一二
兌	四	一〇	九
離	六	一二	八
震	七	九	四
巽	四	八	七
坎	八	七	一二
艮	七	四	一二
坤	一二		

上經に多きは乾坤にして下經に多きは兌巽なり。是れ亦多少の意味あるが如し。

陰陽の爻數を案ずるに

上經　下經

陽にして陰位に居るもの　四三　五五

陰にして陽位に居るもの　四七　四九

但だ上經は三十卦、下經は三十四卦なる故に其差は一概に過大視すべからざるのみ。

第二十四節　經解

古來六十四卦を解釋したる者は皆各一卦に就て之が註釋を施すに他ならず、卽ち其文字を釋し其義を取り、以て其意を貫通せしめんとするに過ぎず、然るに其中に就て注意すべき點は左の如し。

一、一卦全體は卽ち時勢を示し、各一爻は其時勢に處する所以の位置又は人を言へるものなるが故に此意義を最も抽象的に示さゝるべからず。

二、然るに易の文は恰も謎の如く殆と解釋すべからざるものあり、從て其前後の意味をして聯絡あらしめんには自ら牽强附會の跡あるを免れず。されば古來諸家の註釋も又自ら此等の標準に依りたるものにして、而して就れも牽强附會の跡あるを免れず、然れども其中に就て特に特色ある所のものを擧げんか、左の如し。

一、明の來知德は卦綜を以て易の六十四卦は相ひ互に配列せられたるものなりとなせり、而して其各爻の辭を解するや各卦象に關係ありとなす、然かも卦象は變爻に由りて之を求めることすらありて、徹頭徹尾周易の文字を以て卦象と關係ありとなすことに依りて、最も猛烈なる特色を有することは第一編に於て述べたるが如し。若し此說の如くなる時には、卽ち周易上下經六十四卦三百八十四爻に繫れる卦辭爻辭は皆卦象と關係あるものにして、從て六十四卦を擧ぐれば卽ち一切の辭は悉く之と聯關して生じ來ること恰も茅の根の次第に連續して離れざるが如し。此種の解釋は多少は如何なる學者と雖も皆悉く之を行へるなりと雖も然かも來知德に於て特に其特色を發揮すとなす。

二、日本の東岡、河田孝成は周易新疏を著はし三百八十四爻の辭を解するに當り一々卦變に依りて之を解釋せんとなせり今其一例を擧げんか

初九潛龍勿用

之を解して曰く

潛龍用ゆるなきは周公繫ぐる所の爻辭なり、天下の動に效ふ者なり、筮して

乾に遇ふ者唯初九を得其餘皆七なれば則ち乾姤に之く、下を巽となす、巽を入となし見ざるとなす、稱して而して隱れるとなす、龍は四靈の一なり剛にして最下にあり、而して隱入見ざるに之く、故に其象を潛龍となす人に於ては賢にして微下に隱るゝとなす云々、

即ち初九を變するものとすれば、則ち龍となるが故に潛の意なり、即ち潛龍の潛は卑となすなり、其他九二の見龍田にあり」を解するも九二か變ずるものとすれば、即ち下離となり、離に見の象あるが故に見龍となすと也、河田孝成氏は斯の如くして各三百八十四爻を解するに當り一々其爻が變化する時は、即ち他の卦に之くものとして以て其意味を發見せんとす、亦一見識と云ふべきなり。

三、伊藤東涯は周易經翼通解を著はし、最も平易に六十四卦三百八十四爻の意味を發揮せり、他に何等の特色なしと雖も、其寧ろ通俗的なる所に於て其著書の見るべきあり、即ち三百八十四爻の各一に就て其時勢に當て其位置に居る吉凶の悔吝の別るゝ所以を說明せり、之れ亦一見識なりと云はざるべからず。

四、周易述義は其通俗的なる所に於て亦其特色を見る、學問上に於ては特に言ふべきものあることなし。

五、岡白駒の周易解も亦河田孝成の新疏の如く變爻に就て意味を取る所あれど然かも其文字の上に於て多少の特色を發揮せるものなり、咸の初六を解するに曰く

咸は感なり、感は六爻皆應ず、故に感ずるなり、感に深淺なし、人身を以て喩を取る、潤ふ所近く之を身に取るなり、拇は足の大指なり、初六は咸の初にて感の名を成さず、拇に感ずるの象も、拇は感ずと雖も未だ移らざるなり、只志あるのみ、姤變じて離となる、止て而して下に麗く、動かざるものなり、吉凶は動に生ず未だ動かず故に吉凶を言はず

と、即ち茲に麗の一字を下せるは初六の變せるものとして離の卦を見る、離の卦より思ひ付きたるものなり。

六、程傳は理を以て易を解し、最も流暢にして解し易しとなす、近世に於て一大特色あるものなり。

七、朱子の本義は、卽ち全く占筮の上より解釋したるものなり。故に程傳と共に對して以て其特色を見る。

王弼の易を解するや老子を以てすと云ふと雖も、然かも卦象に依りて能く其義を得たることは今言ふを須ひず、其他諸家の說は孰れも卦象よ　卦辭爻辭を解釋せんとする所に於ては卽ち大同小異なりと云ふべきなり。小異が則ち特に注意せられて學者研究の趣味を促しつゝある也、然るに吾人を以て之を見るに周易六十四卦三百八十四爻の辭を解釋するは殆ど先賢諸子の書に於て其蘊奧を盡すと云ふべきのみ、周易折中の如きは、殊に能く折中し得たりと言ふべきのみ、今の時に當りて六十四卦三百八十四爻の辭を解せんとする者は卽ち恐らくは此以上に出づる能はざるべし、然るに西洋哲學の發達せる今日に於て周易を解釋せんとする者は頗る短刀直入一目瞭然六十四卦を捉へて之を念頭に思ひ浮ばしめざるべからず、斯くせんとするには、卽ち六十四卦を以て人生の各方面を代表するものと見るの外なきのみ則ち余が以上列擧せる所の如く余は余の分類法を以て、決して完全なりとするにあらず只余が易を解する爲に苦心せる結果分類の否むべからざることを知るに至りしのみ、周易六十四卦三百八十四爻の辭を解釋せるものは以上列擧せる如くに止まらんや、殆ど汗牛充棟も當ならざるなり、然も六十四卦をして一目瞭然たらしめんが如きものは世に之あるが見ざるなり。此點に於ては余は聊か周易の眞義を解釋し得たりと信ずるものなり。易を解する者之を全體の上より見る能はずして、單に其一局部とり其意味を得しめんとする時は殆ど吾人の解すること能はざる所に屬す。近頃支那の某氏周易闡微を著はす、然かも之を以て中國最後の哲學となす、一切世界の學術を採り來つて以て之を易に關係あるものとなす、素より易に依りて多少の萌芽を發見し得べしと雖も斯の如きものは以て易を解する所以にあらざるなり。

第二十五節　王弼の易應用論

言者所以明象、得象而忘言、象者所以存意、得意而忘象、是故存言者非得象者也、存象者非得意者也、象生於意而存象焉、則所存者乃非其象也、言生於象而存言焉、則所存者乃非其言也、然則忘象者乃得意者也、忘言者乃得象者也、得意在忘象、得象

在忘言。

此れ王弼が易を深義に解釋したる者にして、要するに言象の外に於て易を一身に體し、應用礙碍なきことを期する者なり。歸する所は余が前章に於て述べし處の易の應用說に合致するに外ならず。

第二十六節　張孟劬の易論

余近頃張孟劬の史徵を讀みしに易の應用論中見るべき者あるに似たり。乃ち左に採錄して以て參考に供す。

再推之六十四卦。君子以飲食宴樂。則取諸需。君子以作事謀始。則取諸訟。類族辨物。則取諸同人。遏惡揚善。則取諸大有。損多益寡。則取諸謙。作樂崇德。則取諸豫。厚下安宅。則取諸剝。至日閉關。則取諸復。辯上下定民志。則取諸履。愼言語節飲食。則取諸頤。凡若此者。原始要終。無不有一定之準焉。故曰。易者象也。天下有其事。卽有其象。陰陽變動之理不測。世人所忽略者。聖人前知其吉凶。爲之思患而預防之。防之之道奈何。曰以柔濟剛。以弱勝强。以退左進而已。

後世儒者。苟能本孔子之意。以學易。安而不忘危。存而不忘亡。治而不忘亂。於吉凶悔吝。卽增修其德以應之。於凶之將萌也。卽恐懼其德以臨之。以之飭躬。則樂天而不憂焉。以之治國。則觀其會通以行其典禮焉。天人性命道德之奧。一以貫之。幾可以道濟天地矣。」

要するに易道は自然の法則なるか故に陰中に陽を見、陽中に陰を見、警戒して以て其業を墜すことをなからんことを期するものにして、諸家の見大概相一致すと謂ふべきなり。

第二十七節　六十四卦の占筮的解釋

聖人は六十四卦を解するに當り專ら處世道德を主とせり。然りと雖も易は占筮を以て本來の用となす。占筮の出來得る樣易を解釋するは又易解釋の一法たり。但だ周易の文は簡にして其要を得がたきのみ。是に於てか、或は六爻世應の說をなして以て之を補ふ。五行易は此れなり。又或は八卦に種々の象を附して以て之を解するものあり。今其の一般を述ぶること左の如し。

○一坎水

天時　雨雪　月　霜　露
地理　北方　江湖　溪澗　泉井　卑濕之地　溝瀆　池沼　凡有水處
人物　中男　江湖之人　舟人　防盜
人事　險陷　卑下　隨波入流
身體　耳　血
時序　冬十一月
靜物　水晶　水中物　鐵器　弓輪
動物　豕　魚
家宅　不安　住居ノ患　暗昧　盜難
屋舍　向北　近水　江樓　宅中濕　水閣
飲食　豕肉　酒　冷物　海味　羹湯　酸味　魚　多骨　帶血物　水中物
生產　有脊核物
難產有險　宜次胎　中男　辰戌丑未月　胎坐向北

求利　有財失　宜水邊財　有失陷ノ恐　宜魚鹽酒水利
交易　不利成交　有奸計恐　宜水邊交易　宜水魚類交易
謀望　不宜成望　不全成功　秋冬亦達望　心勞
墳墓　北方窪穴　水邊　濕地
數目　一六
方位　北方
色　黑
味　鹹酸

○二坤土

天時　天陰　霧氣　晦
地理　里鄉　田野　平地　西南　至靜地
人物　后母　老婦　農鄉人　樂人　大腹人
人事　吝嗇　順靜　柔懦　衆多

身體　腹　脾胃　肉
時序　辰戌丑未月　未申年月日時　五八十月日
靜物　方物　土中物　柔物　布帛絲綿　五穀　輿　釜　瓦器
動物　牛　百獸　牝馬
屋舍　西南向居　村舍　田舍　矮屋　倉庫
宅家　安穩　多陰氣　春占宅舍不安
食物　野味　牛肉　土生物　甘味　五穀　腹臟物　薯芋筝類
求名　西南ノ任　守成　司農ノ職　致官　成章　春占名虛
求利　有利　宜土中利　賤貨重物ノ利　土生物ノ利　安靜得利　布帛ノ利
　　多中ノ得利　春占無利
交易　利交易　宜田土交易　穀物布帛交易　春占不順
謀望　利求謀　鄉里求謀　宜靜中計策　或謀於婦人
天時　風

○三巽木

墳墓　西南地
數目　八五十
方道　西南
色　黃
味　甘

○四震木

天時　雷
地理　東方　樹木　鬧市　大塗　繁盛地　草竹
人物　長男　丈長
人事　震　振　起　動　怒　虛驚　躁　噪　衆多　微靜
身體　足　肝　髮　聲　音　筋
時序　春三月　卯年月日時
靜物　木竹草　木品　長物　舟楫　末梢

動物　龍蛇　馬　飛魚
屋舍　東向居　山林　樓閣
家宅　宅中不時有驚　春占吉　秋占不利　動居
食物　蹄肉　山林野味　鮮肉　菓　酸味
求名　有名　東方ノ任　掌刑官　施號發令職
求利　或開市司貨ノ任
交易　山林竹木ノ財　宜東方　動處有財
謀望　利於成交易　動而可成　木類ノ交　秋占凶
方道　可望　求可　動中計策　秋占不遂
數目　四八三
色　東方
味　青黃碧
求名　酸味
艱難　宜北方ノ任　江湖河泊ノ職　酒漿醋

地理　東南ノ地　草木茂秀ノ所　菜果花園　木菓
人物　長女　秀才　寡髮人
人事　不定　鼓舞　利商三倍　進退
身體　肱股　氣　風疾
時序　春夏ノ交　三五八ノ月日時　辰巳午未年月日時
靜物　木　香臭　繩絲　直物　長物　竹木　工巧器
動物　雞　禽類虫
屋舍　東南向居　寺觀樓閣　山林居
家屋　安穩利市　春占吉　秋占不安
食物　鷄肉　禽虫肉　蔬菓　酸味
求名　有名　文章風才技藝　木竹布帛職　秋占爲財
交易　可成　進退不一　交易ノ利倍
謀望　可起望　有才　可成　又可敗
出行　可行　有出行利　向東南可行　秋占不可行

墳墓　宜東南向　山林樹木中
數目　五三八
色　青　綠　白　碧
味　酸味

○五乾金

天時　天　水　冰　霰　雹　寒　冷
地理　西北　都市　大郡　占勝ノ地　高丘　古跡　開市
人物　君父　考人　官宦　大人　長者　名人　師　門閥
人事　圓成　剛健　武勇　果決　高名　多動　少靜
身體　首　骨　肺
時序　秋　九十月交　戌亥年月日時　五金年月日時
動物　馬　天鷲　獅　象　龍
靜物　金玉　寶珠　圓物　貴物　衣物　木果
剛物　冠　鏡　名刀　銀金　神佛飾物

屋舍　公廳　樓臺　堂　大厦　驛舍　西北向
家宅　秋占　宅興旺　夏占有禍　冬占冷落
食物　馬肉　大魚肉　乾燥物　名骨　辛辣物　珍味　諸物
生產　易產　秋占生貴子　坐西北向
交易　易成　寶玉金幣貴貨　夏占不利
名利　有玉金　公舍得財　高顯貴人財　秋吉　冬無財　夏損財
謀望　有成　初吉　半終吉　多空望　多謀　少遂
出行　西北　京師　遠行　歸順　夏占凶
官訟　健訟　空漠歸格
墳墓　西北高丘　寺社內
數目　一四九
方位　西北南
色　丈赤　玄
味　辛辣

○六兌金

天時　雨澤　新月　星
地理　澤　池　水際　飲地　廢井　崩破溜
人物　少女　妾　歌妓　伶人　譯人　巫師
人事　喜悅　口舌　讒毀　謗說　食飲
身體　舌　口　肺　疾　痰　涎
時節　秋　八月　酉　金　年月日時　二四九數
靜物　銀　飾物　樂器　缺器　廢物　流通物
動物　羊　小獸　角獸　澤近
屋舍　西向　近澤　敗墻　壁宅　門戶破
家宅　不安　女人妨　口舌　秋占　喜悅
食物　羊物類肉　澤水物　河魚
婚姻　可成　秋占吉　少女婚　不利
產生　不利　損胎　成則生女　坐西向

名利　無利　財利上　口情起　秋占喜
交易　不利　紛議　爭競　西向交付ノ喜
謀望　難望　計策破　秋占喜
出行　不宜遠行　或損失
謁見　西方見　女人妨
官訟　訟未已　曲直決　損失　刑處　女論
墳墓　西處　高處ノ缺陷處　澤川ノ近傍
數目　二四九
色　白
味　辛辣

○七艮塊

天時　雲　霧　山　嵐
地理　山逕路　嵒山　山城　丘陵　墳墓
人物　少男　閑人　山中人　傲慢

人事　阻滯　守靜　進退不決　反背　止住　不見
身體　手指　骨　鼻　背　腰
時候　冬春交　十二月　丑刀十一年月日時　七　十
靜物　土石　瓜菓　塊　黃物　土中物　剛物　高物
動物　虎　狗　鼠　百禽　豁豚屬　四足
家宅　安全　諸事有阻　家人不睦
屋舍　東北向　山居　嵒石近　高覆屋　近路
食物　土中物　諸獸肉　墓　寺畔　竹筍ノ如キ物
婚姻　阻隔　難成　自先來遲而成　小男婚　春占不利　鄉里中婚　實直家
交易　難成　有山林田土交易　春占有失
謀望　阻隔難成　進退迷
墳墓　東北塊嵒　山中穴　高石丘　寺內　近路
數目　五七十
色　黃

味　甘味

○八離火

天時　日　輝　電　虹　霞　半晴　半雨
地理　南方　乾亢地　爐冶所　文明地　地陽氣　學校地
人物　中女　文人　大腹人　胎婦　目疾人　美衣　學士
人事　文書　才學　法學士　證　類　目　心
時節　五月　午火年月日時　三　二　七
靜物　火　文書　甲冑　干戈　槁木　赤色物　外剛
要用多貴器　網罟
動物　雉　龜　鯊　蟹　螺　蚌　大鳥
屋舍　南向　明窓　虛堂　長屋　文舍　公舍
食物　雉肉　燒炙物　熱肉
生產　易生　中女　冬占有失　坐南向
名利　有財　又東　巽　吉　文筆利

交易　可成　文書　株券交易
數目　三　二　七
色　赤　紫　紅
味　苦

凡て略に從へり。余は六十四卦の解にも此種のものあることを解し併せてト筮家の參考に資せんとすること然り。所謂八卦の象に外ならざれども又以て六十四卦が無限の意味に解せらるゝを知るべし。

第三章　十翼の思想

第一節　記述法

吾人は十翼を以て同一人の作となさず。十翼の名稱は何人に始まりしか明からず。然れども其の幾人なるや亦固より知るを得ず。伊藤東涯は左傳に魯の昭公の二年晉の韓宣子魯に聘して易の象と魯の春秋とを見る。曰はく周公の德と周の王たる所以とを知る。とあるを以て大象となす。然れども此の如きは餘まり推察に過ぎたり。易象は周公の爻辭とも解すべく、又は六十四卦其者の象とも解すべし。故に但だ文體と意味とより判ずべきのみ。固より精密に知る能はざるも乾坤二卦の彖と象とは雄渾にして古色蒼然、繫辭は清勁にして鋒芒露見す。文言は流麗にして敍事的なり。序卦は六十四卦の順序を論じたる者なれども牽强附會の一語は以て此の篇を蔽ふべし。其の他も亦各々當る所あり。是の故に吾人は十翼が幾人の手に成り

しやを斷言する能はざるも各篇別人の作として述ぶるを適當なりと信ず。況んや各篇六十四卦の注脚として六十四卦の異方面を見たるなるに於ておや。

第二節　彖の哲學

彖は六十四卦の各々に之れあり。彖は古注に據れば斷なり。一卦の吉凶を斷ずるなり。卽ち各卦の意味を斷定せるものなり。亦通じて之を彖といふ。故に各卦の解釋を附するときに附記するを以て適當とす。古來の說に據れば十翼は固上下經の後に在りしなれども費氏以來彖象文言を以て卦中に雜入せり。王氏又爻の彖辭を分ちて當爻の下に附す。註脚として見れば此くあるべき者なり。唯だ彖の中に特別に彖の哲學として目するに足る者あり茲に之を述ぶ。

彖は乾元坤元の二元論 (Dualism) なり。以爲らく萬物は二氣の和合によりて生ず。乾元は積極的にして男性、坤元は消極的にして女性なりと。曰はく。

大なる哉乾元、萬物資て始む。乃ち天を統ぶ。
至れる哉坤元、萬物資て生ず。乃ち順にして天を承く。

是れ男女の關係より思ひ付き之を天地に應用したる者なるべし。天地あれば則ち其の象あり。聖人之に則りて以て行動す。乾に付て曰はく。

大に終始を明かにし六位時に成る。時に六龍に乘じて以て天を御す。乾道變化、各性命を正し大和を保合して乃ち利貞。庶物に首出して萬國咸く寧し。

又坤に付て曰く。

至れる哉坤元、萬物資て生ず。乃ち順にして天を承く。坤厚くして物を載す。德无疆に合ふ。含弘光大。品物咸享。牝馬は地の類。地を行くと疆りなし。柔順利貞は君子の行ふ所。先つときは迷うて道を失ひ、後るるときは順にして常を得。西南朋を得、乃ち類と行く。東北朋を喪ふ。乃ち終に慶あり。安貞の吉は地の无疆に應ず。

乾は天なり。又龍なり。龍の天に在るや、一舉一動其の宜きに合す。聖人の處世亦此くの如く其の宜きに合はざるなきなり。而して天下由りて以て寧し。坤は厚くして物を載す。聖人之に則る。又坤は柔順の卦、故に聖人は之に則りて以て柔順の德を行ふ。坤は乾に從ふを以て道となす。

第三節　象の哲學

象は卽ち卦の象を言へる者。乾坤二卦の象は卽ち君子の天地に則るを言へる者。天の行くや日に數千萬里。終りて又始まり。循環端なし。未來永劫に亘りて渝ることなきなり。其の勢力の偉大なる。驚嘆すべきなり。君子は之に則り。自ら彊めて己まざるべし。曰はく。

天行健。君子以て自ら彊ひて息まず。

地は重くして厚く。萬物を包含して厭はず。君子は德を厚くして以て衆人を容るるの量なかる可らず。曰はく。

地勢坤。君子以て厚德物を載す。

第四節　繫辭の哲學

一。天地觀。繫辭は天地を以て不斷活働しつゝある者と觀察せり。卽ち一種の活動觀なり。曰はく。

天は尊く地は卑く乾坤定る。卑高以て陳ねて貴賤位す。動靜常あり。剛柔斷す。方は類を以て聚り。物は羣を以て分れ。吉凶生ず。天に在りては象を成し地に在りては形を成して變化見はる。是の故に剛柔相摩し。八卦相盪し。之を鼓するに雷霆を以てし。之を潤すに風雨を以てす。日月運行。一寒一暑。

而して乾坤二氣によりて一切萬物を化生す。曰はく。

乾道は男を成し坤道は女を成す。乾は大始を知り。坤は成物を作す。乾は易を以て知り。坤は簡を以て能くす。易なるときは則ち知り易く。簡なるときは則ち從ひ易し。知り易きときは則ち親あり。從ひ易きときは則ち功あり。親あるときは則ち久しかるべく。功あるときは則ち大なるべし。久しかるべきときは則ち賢人の德。大なるべきときは則ち賢人の業。

卽ち一種の活動觀也。一草の生ずるも陰陽二氣の和合ならざるなく。一蟲の化するも亦陰陽二氣の和合ならざるなし。一切の現象皆二元氣の作用ならざるなきなり。

二。陰陽觀　以上述べたる如く二氣によりて化生せらるゝは天地間の狀態也

易は此れよりして其法則を抽象せんとする者。故に生々觀をなして曰はく。

生々之謂、通。繫辭上傳第五章

而して如何なる場合に於ても、換言すれば其の大より見るも小より見るも陰の狀態と陽の狀態と轉顛相緣るとなすは其の根本原理たり。曰はく。

一陰一陽之謂、道。同上

此法則は未來永劫に亘りて變ずることなきなり。故に未來永劫のことも亦以て知り得べしとなす。此れ占筮の根本思想なり。曰はく。

極、數知、來之謂、占。同上

一現象は自然現象にまれ、道德現象にまれ、皆陰陽の二方面を供へざるはなし。善とは陰陽の道に從ふに外ならず。性とは陰陽の道を體するに外ならず。故に曰はく、

繼、之者善也。成、之者性也。同上

而して陰陽兩者は廣大無邊にして一切の道德皆之を以て根本となす。仁者は其の方面より見て仁と謂ひ、知者は其の方面より見て知と謂ふ。百性は此道に由りながら其の然るを知らず。曰はく。

仁者は之を見て之を仁と謂ひ、知者は之を見て之を知と謂ひ、百性は日に用ひて知らず。故に君子の道鮮し。

此れ道の廣大なるをいへる者なり。

三。大極論。支那古代には一元氣あり。分れて陰陽となり、四時となり、八象となり。終に一切萬物となりしといふ信仰あり。一元氣の分るゝは已に不明なり。四時が陰陽なりと云ふも亦然り。然れども社會的遺傳の勢力は人心を司配し、疑を惹き起こさしむることなかりき。曰はく。

易に大極あり。是れ兩儀を生ず。兩儀四象を生ず。四象八卦を生ず。八卦吉凶を定め、吉凶大業を生ず。

生じたる後より見れば天地を以て最大の現象となし、四時を以て最著の現象となす。又曰はく。

天地の道は貞にして觀す者なり。日月の道は貞にして明かなる者なり。天下の動は夫の一に貞なる者なり。

而して天地は猶ほ不斷生々しつゝある者。此れ天地の德にして聖人に在りては仁なり。曰はく。

天地の大德を生と曰ふ。聖人の大寶を位と曰ふ。何を以て位を守る。曰はく仁。何を以て人を聚むる。曰はく財。財を理し辭を正し民の非を爲すを禁ずるを義と曰ふ。

宇宙は陰陽の法則に由りて司配せられ、不斷生成し、而かも無意識的なり。曰はく。

之を仁に顯し之を用に藏し萬物を鼓して聖人と憂を同じうせず。盛德大業至れる哉。

卽ち造化自然の狀態を形容したる者に外ならず。一種の倫理的宇宙論と謂ふべきなり。

四。倫理論　易の根本思想は陰陽と生々と是れなり。而して支那の倫理思想は天地に則るを以て一般とす。今易の文を見るに曰はく。

一陰一陽之を道と謂ふ。之を繼ぐ者は善也。之を成す者は性也。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、知者は之を見て之を知と謂ひ、百姓は日に用ひて知らず。故に君子の道鮮し。之を仁に顯し之を用に藏し、萬物を鼓して聖人と憂を同じうせず。盛德大業至れる哉。富有之を大業と謂ひ、日新之を盛德と謂ふ。生々之を易と謂ふ。象を成す之を乾と謂ひ、法を效す之を坤と謂ふ。數を極め來を知る之を占と謂ひ、變に通ずる之を事と謂ふ。陰陽測られざる之を神と謂ふ。天地の大德を生と曰ふ。聖人の大寶を位と曰ふ。何を以て位を守る。曰はく仁。何を以て人を聚むる。曰はく財。財を理し辭を正し民の非を爲すを禁ずるを義と曰ふ。

是れ等の句に由りて見るときは天地の根本は生にして仁は之に則りし者、卽ち善、卽ち性となすべきが如し。隨て又一元の氣となすべき如し。宋の程明道は正さに此の解釋をなしたる者。明道に據れば一元氣あり、生々已むことなし。人に在りては性となり、德に在りては仁となり、善となるなり。又曰はく。

天地設位。而易行。乎其中矣。成性存存。道義之門

此れ亦性と天地の道とを接近し、若くは關係ある者となすが如し。卽ち天地は

生を以てことなし。聖人は天地の氣を受けて生じ、其の性に於て生的なり。卽ち仁なり。其の天地に則るもの如何と言ふに。乾の德は易にして坤の德は簡なり曰はく。

乾は易を以て知り坤は簡を以て能くす。易なるときは則ち知り易く簡なるときは則ち從ひ易し。知り易きときは則ち親あり。從ひ易きときは則ち功あり。親あるときは則ち久しかるべく功あるときは則ち大なるべし。久しかるべきときは則ち賢人の德、大なるべきときは則ち賢人の業、易簡にして天下の理を得。天下の理を得て位を其の中に成す。

夫れ乾は、天下の至健なり。德行恒に易にして以て險を知る。夫れ坤は天下の至順なり。德行恒に簡にして以て阻を知る。

次に聖人は一切を知り、遠くとして宜からざるなきを述べて曰はく。

天地と相似たり。故に違はず。知萬物に周くして道天下を濟ふ。故に過ぎず。旁行して流れず。天を樂み命を知る。故に憂へず。仁に敦し。故に能く愛す。

又曰はく。

日往けば則ち月來り、月往けば則ち日來る。日月相推して明生ず。寒往けば則ち暑來り暑往けば則ち寒來る。寒暑相推して歲成る。往とは屈なり。來とは信なり。屈信相感じて利生る。

易は宇宙間に三種の法則ありとなす。曰はく。

易の書たるや廣大悉く備る。天道あり。人道あり。地道あり。三才を兼ねて之を兩にす。故に六。六とは他に非ず、三才の道なり。

卽ち天地に陰陽剛柔ある如く人間社會には仁義の二ありて以て之を司配すとなすなり。

五。神論　易は理論の上にて建設せられたる者、神を假定するは其の本意にあらず。若し之を假定すとするも單に消極的に假定せられたるに外ならず。其の作用は一も積極的なる者あるなき也。故に易は單に陰陽の變化測る可らざる所を名けて神と云ふとなせり。曰はく。

陰陽不測之謂神。

又曰はく。

故神无方、而易无體。

是れ又神の積極的作用を說けるにあらずして之を形容せるに外ならず。其の神の字を解して靈魂と、なす者は左の一節なり。曰はく。

精氣物と爲り、遊魂變を爲す。此の故に鬼神の情狀を知る。

人に氣と魂とあり、氣は鬼となり、魂は變化をなす、然れども一方に於て鬼神の字は甚だ輕く用ひらる。

子曰。知變化之道者其知神之所爲乎。

易无思也。寂然不動。感而遂通天下之故。非天下之至神。其孰能與於此。

夫易聖人所以極深而研幾也。故能通天下之志。唯幾也。故能成天下之務。唯神也。

故不疾而速。不行而至。

是故蓍之德圓而神。

神以知來。以藏往。其孰能與於此哉。古之聰明叡知神武而不殺者夫。

是以明於天道。而察於民之故。是興神物以前民用。聖人以此齋戒。以神明其德夫。

利用出入。民咸用之。謂之神。

是故天生神物。聖人則之。

鼓之舞之。以盡神。

推而行之存乎通。神而明之存乎其人。

於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。

神而化之。使民宜之。

窮神知化德之盛也。

子曰知幾其神乎。

以通神明之德。

人謀鬼謀百姓與能。

神を以て全知全能(omniscients, omnipotens)となす。然れども易の作者の神に對する態度は甚だ冷淡にして單に「神變不測」の如き形容詞として感じ、其れ以上の意味を發見せざるなり。以上の引用文を參考して以て其の然るを知るべし又天より之を祐くの句至る處にあれども天も、亦輕き意味にして孔子が之を信せしと同一程度なるべし。

繫辭の作者が其腦中に全知全能なる神の觀念を有するとは云ふ迄もなし。然れども此れ繫辭の作者の腦中に在るものにして易の範圍にあらず。易は宇宙の神變不可思議なる變化を表象せんとする一種の思想系統なり。其現象が神に由りて司配せらるゝと否とは易の言はざる所に屬す。假令ひ神を假定するが如く思はるゝも、此神の計畫(plan)を合理的に說明し悉くさんとするは易哲學本來の面目にして繫辭に由りて之を知り得べし。其の不測之謂神といひ又變化の道を知る者は其れ神の爲す所を知るかといふ如き變化の道を知り得る者となし、同時に神の全計畫を知り得るものとなしたるなり。

此れ等は最も善く之を示めす者也、又鼓之舞之、以盡神といひ、此所以成變化而行鬼神也といへる如き何れも然らざるはなし、故に當時一般人乃至は易經の作者に至る迄宇宙に一大神のあるとは之を假定せしなるべきも神の計畫を合理的に說明し悉さんとするが抑も易なる一種の思想系統の目的なり、當時の人乃至は易經の作者の思想と易其者の思想系統とを混同するとなくんば易を解する所以に於て庶幾かるべきなり。

第五節　說卦の哲學

一　易贊　說卦は聖人の易を作れるは萬物の根柢を穿てるなるを說けり。天に在りては陰と陽、地に在りては柔と剛、人に在りては仁と義を取りて六爻を立てたり、此れ卽ち天地の根本的運命なり。說卦が命の字を用ふるは方さに此の意味に於てす。曰はく。

和順於道德、而理於義、窮理盡性、以至於命。

又曰はく。

昔聖人の易を作るや、將に以て性命の理に順はんとす、是を以て天の道を立つ、曰はく陰と陽と。地の道を立つ、曰はく柔と剛と。人の道を立つ、曰はく仁と義と、三才を兼ねて之を兩にす、故に易は六畫にして卦を成す、陰を分ち陽を分ち、迭に柔剛を用ゆ、故に易は六位にして章を成す。

二　自然論　天は萬物を覆ひ地は之を載す、山澤、雷風、水火其の間に活動す、曰く。天地位を定め山澤氣を通ず、雷風相薄り水火相射はず、八卦相錯す。

雷以て之を動かし、風以て之を散し、雨以て之を潤し、日以て之を晅し、艮以て之を止め、兌以て之を說し、乾以て之を君とし、坤以て之を藏む。

又八卦の性質を說明し、其の能く變化を興し得る所以を說明して曰はく。

神とは萬物に妙にして言を爲す者なり、萬物を動かす者は雷より疾きは莫く萬物を撓す者は風より疾きは莫く萬物を燥す者は火より熯すは莫く、萬物を說す者は澤より說すは莫く、萬物を潤す者は水より潤すは莫く、萬物を終へ萬物を始る者は艮より盛なるは莫し。故に水火相逮び雷風相悖らず、山澤氣を通じて然る後、變化して既に萬物を爲す。

三　方位論　八卦四時に配すべく、又方位に配すべし、是を以て吾人の聯想は方位と四時とを混同することあり、卽ち東方は春なるを以て東方にて物は生ずとなすなり、此の如き聯想の混同にて說卦の一章は成れり、曰はく

帝震に出で、巽に齊ひ、離に相見れ、坤に致役し、兌に說言し、乾に戰し、坎に勞し、艮に成言す。萬物震に出づ、震は東方なり、巽に齊ふ、巽は東南なり、齊とは萬物の潔齊なるを言ふ、離とは明なり、萬物皆相見る、南方の卦なり、聖人南面して天下に聽く、明に嚮つて治む、蓋し諸を此に取るなり、坤とは地なり、萬物皆養を致す、故に曰はく坤に致役すと、兌に正秋なり、萬物の說ぶ所なり、故に曰はく兌に說言すと、乾に戰ふ、乾は西北の卦なり、水火相薄るを言ふ、坎とは水なり、非北方の卦なり、勞卦なり、萬物の歸する所、故に曰はく坎に勞すと、艮は東北の卦なり、萬物の終を成す所にして始を成す所也、故に曰はく艮に成言すと、

第六節　文言の哲學

文言は元亨利貞の四字を以て四德となせり、是れ特別なる解なり、曰はく。

元は善の長なり、亨は嘉の會なり、利は義の和なり、貞は事の幹なり。

而して乾德を形容して剛健中正、純粹精なりとなせり、曰はく。大なる哉乾や剛健中正、純粹精なり。又大人を以て其の智德天地と同きなりとして曰はく。

夫れ大人は天地と其の德を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合す。天に先つて天違はず、天に後れて天時を奉ず、天且つ違はず、而るを況んや人に於てをや、況んや鬼神に於てをや

又君子の行爲を四分し學問寛仁の四となし、述べて曰はく。

君子學以て之を聚め、問以て之を辨へ、寛以て之に居り仁以て之を行ふ。

又忠信と誠と終を知るとを以て君子の必要條件となすを述べて曰はく。

君子德に進み業を修む。忠信は德に進む所以なり。辭を修めて其の誠を立つるは業に居る所以なり。至を知つて之に至る、與に幾すべきなり。終を知つて之を終ふ。與に義を存すべきなり。

又平生君子の標準となすべき所を述べて曰はく。

庸言之れ信じ、庸行之れ謹む、邪を閑て其の誠を存し、世に善くして伐らず、德博くして化す。

君子は其の進退を謹むべく、若し出づべからざるのときに於ては天命を知りて之に安んずべしとなす。卽ち初九潛龍勿用の句に付て曰はく。

子曰ふ、龍德にして隱るる者なり、世に易られず、名を成さず、世を遯れて悶ることなく、是とせられずして悶ることなし、樂むときは則ち之を行ひ、憂ふるときは則ち之を違る。確乎として其れ拔くべからざるは潛龍なり。

聖人起りて天下平かならざるなし。曰はく。

子曰ふ、同聲相應じ同氣相求む、水は濕に流れ火は燥に就く、雲は龍に從ひ風は虎に從ふ、聖人作つて萬物覩ゆ、天に本づく者は上を親み地に本づく者は下を親む、則ち各其の類に從ふなり。

上九は亢龍にして悔ひある者なり。若し夫れ聖人は獨り進退存亡を知りて其の機を失はず、曰はく。

其れ唯聖人か、進退存亡を知つて其の正を失はざる者は其れ唯だ聖人か。

又文言傳には因果應報の觀念あり、然かも其の原因は微より起るが故に宜しく之れを防ぐべしとなす。曰はく。

積善の家必ず餘慶あり、積不善の家必ず餘殃あり。臣其の君を弑し子其の父を弑す。一朝一夕の故に非ず。其の由つて來る所の者漸なり。之を辨じて早く辨せざるに由るなり。

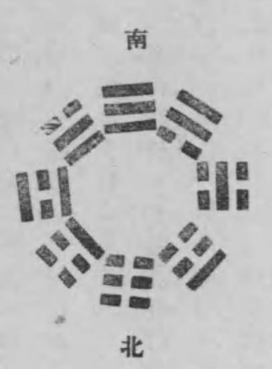
繫辭傳中に之に似たる言あり、曰はく。

善積まざれば以て名を成すに足らず、惡積まざれば以て身を滅すに足らず。

小人は小善を以て益なしと爲して爲さず、小惡を以て傷れなしと爲して去らず、故に惡積んで掩ふべからず、罪大にして解くべからず。

此れ實に因果應報の思想にして支那の碇人は善惡共に微より起る所以に注意せり。

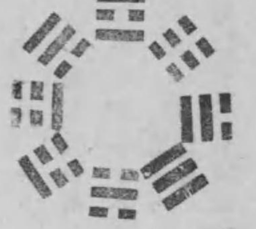
邵康節所謂伏犧八卦の圖は左の如し。



此れ先天の順序と、說卦第三章の句と及び自然の連想とに本づけるなり。說卦第三章に曰はく。

天地位を定む、山澤氣を通ず、雷風相薄る、水火相射はず、八卦相錯る、往を數ふる者は順、來を知る者は逆、是の故に易は逆數なり。雷以て之を動かす、風以て之を散す、雨以て之を潤ほす、日以て之を暄かす、艮以て之を止む、兌以て之を說ぶ、乾以て之を君とす、坤以て之を藏む。

之を以て伏羲氏となすは經世書觀物外篇下に在り、獨斷の見なり、文王の方位は左の如し。



是れ說卦傳中に示したる方位に本つく。說卦傳に曰はく。

萬物震に出づ、震は東方なり、巽に齊ふ、巽は東南なり。齊とは萬物の潔齊なるを言ふ、離とは明なり、萬物皆相見る、南方の卦なり、聖人南面して天下に聽く、明に嚮つて治む、蓋し諸を此に取るなり、坤とは地なり、萬物皆養を致す、故に曰はく坤に致役すと、兌は正秋なり、萬物の說ぶ所なり、故に曰はく兌に說言すと、乾に戰ふ、乾は西北の卦なり、陰陽相薄るを言ふなり、坎とは水なり、正北方の方なり、勞方なり、萬物の歸する所なり、故に曰はく、坎に勞すと、艮は東北のまなり、萬物の終を成す所にして始を成す所なり、故に曰はく艮に成言すと。

朱子は以て文王の方位となせども獨斷なり、此の方位に關し朱子の言ふ所は一も當らず、主觀的に連想の上より成るべく東洋的僻見を離れ冷かに之を考察するに東方は日の出る處として陽氣の存する如く、南方は日の中する處として

陽氣の極まる如く、而して西方は日の沒する處として陰氣の存する如く、北方は日の全く廻らざる處として陰氣の極まる所の如く感せらる。而して四方の中間卽ち四維は各前後兩性の調和の如く感せらる、日常の經驗に於て家の東南西北は各々上述の連想に該當す。東方は日出るも未だ甚だ温かならず、西方は日沒すと雖も猶甚だ寒からず、南と北とは其の極に當るなり。東より南、西、北を經て復東に還る順次に變遷あるなり。此れ實に自然の聯想なり。北半球に住する者は皆然りと答へざるを得ず。

然るに陽極まれば則ち陰生じ、陰極まれば則ち陽生ず。故に此順次に於て陽の始めて生ずるは東にあらずして、而して東北なり。陰の始めて生ずるも亦西にあらずして、而して西南なり。卽ち圖に示す所の如し。

今八卦に於ても亦這般の順次ありや、爻の上にて考ふるに陽の極は乾☰なり陰の極は坤☷なり、陽の始めて生ずるは震☳陰の始めて萠するは☴巽なり、陰の中なるは離☲陽の中なるは坎☵なり、陰の更に央なるは兌、陽の更に央なるは艮なり。之を方位に排すれば卽ち正さに所謂伏羲の方位なり、伏羲の方位は卦爻の上にては當れりとなすべし、次ぎに八卦の象に付て之を考ふるに的として其の位置に在りと云ふ可らず、天は何故に南方地は何故に北方なるか兌澤は寧ろ西方ならざるか、山は何故に西北方なるか、吾人の聯想を滿足すること能はざるなり・文王の八卦を見るに☰と☷とを對せず、☳と☱とを對せず、☶と☱とを對せず、卦爻の上に於て明かに穩かならず。八象の上に付て考ふれば天を西北に置き地を東北に置くは何等の聯想をも伴はず、故に卦爻の上に於て伏羲の八卦は人情に近き者なり。其の他のものは何れも次第には眞理を去ること愈々遠し、然も元來易を説く者此の方位を用いたり、實際に合はざること甚しいかな、

第七節　八卦の象

說卦傳なる八卦の象は第一編に出づ、此外荀爽集解に列せられたる象あり。今便宜之れを附記せんとす。卽ち乾に於ては龍、直、衣、言、是れなり、地に於ては牝、迷、方、裳、囊、黃、帛、漿、是れなり、震に在りては玉、鶴、鼓れなり、巽に在つては楊、鶴是れなり坎に於ては宮、律、可、棟、叢、棘、狐、桎、梏是れなり、離に於ては牝是れなり、艮に在りては、虎、狐、是れなり、而して兌に在りては常是れなり、

此れ等の意味には解すべからざるものもあり、朱子すら尙「多く曉るべからざるものあり」と言へり、又其中に就て曉り得るものあるにせよ、今日の思想界を滿足し得るが如き者にあらず、只だ歷史上の一種の產物として觀察せらるべきのみ、今一例を擧けて以て其然るを說明せん、巽の卦に「白」の象あり、其理如何といふに、河田孝成の說に據れば風吹きて塵を去りために潔白なるに取るなり、又「長」の象あるは同く風行くと遠きに取るなり、又高の象あるは風の性は高遠なると、又木生じて上るとに取るなり、此れ等の解釋は今日の人に取りては殆んど意味をなさゝるの感あるべし、又坎の卦「下首」の解釋に上柔なるが故に（䷅上の爻陰なるを言ふ）首を下にして昂らず、水流れて下に向ふの象とあり、「薄蹐」の說明に下柔なるが故に（䷁の下爻陰なるを言ふ）蹐薄くして厚からずとあり、「曳」の解釋には足曳いて歩むと高からず、皆水流地を磨して行くの象とあり、善く之を味ふときは首肯すべきものなきにあらず、例へば水の地に磨して行くと人の足を曳いて行くと似たりと思はるゝ所あり、然れども之を以て滿足し得べきか、今日の人より見れば茶人が四疊半の座敷に於て蚊の飛び蠅の止るを見て句を作り得意を感ずるが如し、到底滿足すること能はざるべし、各卦の下なる種々の象の意味に付ては茲に說明するの必要なかるべし、詳かなることは河田孝成の周易新疎又は中村惕齋の筆記周易本義等を見るべし、胡炳文は通釋に於て八卦の象を分類し、「相對して象を取る者」「相反して象を取るもの」「相因りて象を取る者」など分類したるは易の作者が宇宙萬象を八卦に配當するに當り、如何なる方法に由りしかを說明するものなれども茲に論述することを略す。

占筮家は多く此れ等の象を取りて以て判斷の材料となす、故に之を批詳的に觀察する者は之を別とし易の範圍內に入りて占筮せんとするものは必ずや卦象に通ぜざる可らざるなり、

第八節　八卦の順序

前編に於て八卦の生成は爻を積むに在るを述べたり。八卦は如何なる順序に排列せらるべきやを言はず。此の順序は八卦が如何にして生成せられしや、生成の順序を以て定むるの外なきなり。生成の順序に關し、二說あり。

(一)　繫辭傳易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。の句に據るる者。邵康節は伏羲氏の八卦を作る全く下より積みしとなす者にして其の著皇極經世書の卷頭に「伏羲始畫八卦圖」と題し示して曰はく。

乾　兌　離

震　巽　坎　艮　坤

乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の順序なり。是れ最も自然的必然的にして先天的に知り得ら

るゝ者と觀察せるゝなり。邵康節曰はく。

先天學心法也。圖皆從中起。万化万事生於心也。（卦位圖宋元學案十）

又曰はく

万物各有太極、兩儀、四象八卦之次。亦有古今之象。（外篇上）

而して之を以て畫前に易ある者となせり。程明道は之を名けて「加一倍の法」となせり。六十四卦の生成に就て邵子は四爻五爻六爻と積めりと爲し、程子は然らず。朱子は不知とす。

（二）說卦傳の父母六子の說に本く者。卽ち先づ乾坤の二卦ありて次に震（長男）巽（長女）を生じ、又次に坎（中男）離（中女）を生じ、更に艮（少男）兌（少女）を生せしとなすなり。卽ち乾、坤、震、巽、坎、離、艮、兌の順序なり。河田孝成の周易新疎是れなり。

何れの順序を撰むべきか思想の上より看れば前者は簡單にして後者は複雜なり。易の作者が先づ ☰ と ☷ とを積み、而して後他の六者を生せしとなすは非なり。☳ と ☴ とを手にし爻を積みて或ることを表はさんとする第一の進動は必ずや爻を感覺的に規則正く行ふに外ならず。先づ思想を弄するが如きはあり得べからざるなり。故に先天の圖は八卦の自然的順序を示し、後天の圖は父母六子の義を示す者として兩立せしむべきなり。邵伯温曰はく。

先君云。天地定位。乾與坤對也。山澤通氣。艮與兌對也。雷風相薄。震與巽對也。水火不相射。離與坎對也。此伏羲氏易也。乾卦初爻。於坤卦初。得震。震爲長男。坤卦初爻。於乾卦初。得巽。巽爲長女。乾卦二爻。於坤卦二。得坎。坎爲中男。（中略）能生八卦。（皇極經世書）

邵康は兩者を退けざるなり。繫辭傳は後世の作なり。易の創作者の說を考ふるは唯だ自然の心理作用に據るべきのみ。

要するに八卦の順序は二あり。兩者を併用して矛楯するなきなり。

第九節　六十四卦貞悔生成の說

內卦を貞といひ、外卦を悔といふ。本卦を貞といひ、之卦を悔といふ。左傳に曰はく。蠱の貞は風、其悔は小と晉語に曰はく。貞は屯、悔は豫。悔とは變化の意なり。八卦の中の乾一卦を貞といふ時は此上に八悔卽ち八卦を積むを得べし。一貞八悔、而

して八卦を得。左の如し。

乾　泰　大壯　小畜　需　大有　大畜　夬

若し八貞なる時は六十四卦を得べし。周禮に經卦八、別六十四とある者是れなり。此れ六十四卦生成の方法なりしなるべし。但だ吾人は加一倍の法を取るが故に、乾兌離震巽坎艮坤の順序に從ひて以て排列せられたるを信ずる者なり。

第十節　之八に就て

左傳に之八といふことあり。其の文に曰はく

襄九年傳、穆姜東宮に薨ず、始往きて之を筮す。艮八に之くに遇ふ。史曰く是を艮隨に之くと謂ふ。隨は其れ出づる也、君必ず速に出づ。姜曰く、亡し是れ周易に於て曰く隨は元に亨る貞に利し、咎無し。元は善の長也。亨は嘉の會也。利は義の和なり。貞は事の幹也。仁を體し、以て人に長たるに足る。然り、固より誣ふべからざるなり。是以て隨と雖も、咎なし。今我婦人亂に興り、固て身を害す、利と謂ふ可らず、位を捨てて嫉す、貞と謂ふ可らず。國家靖からず。亨と謂ふ可らず、作して咎なし、我皆之無し、豈隨ならんや。我則ち惡を取る、能く咎無からんや、必ず此に死せん。出づるを得ざるなり。

と。又晉語に云はく

重耳河に及び、董因公を河に迎ふ。公問ふて曰く、吾其れ濟らんか、對へて曰く、

臣之を筮し、秦䷀八に之くを得。曰く、是れ天地配享、小往大來と曰ふ。今之れに及ぶ何ぞ濟らざるか之れ有らん。

又曰はく。

晉の惠公卒す。秦伯、將に重耳を晉に納んとす。公子親しく之を筮して曰く尙晉國を肖たん。貞屯䷂悔豫䷏を得、皆八也

と。之八に就ては諸說あり。前條の杜註に云はく。

艮下艮上艮。周禮太卜掌三易。然而雜用連山歸藏周易。二易皆以七八爲占。故言遇艮之八。

此說に據れば不變爻は六二の一爻あるのみ。六二は八にて出でし者。八は不變なり。連山歸藏の二易は不變を尙ぶが故に不變爻に就て占ふ。不變爻あるときは之を注意するがために特に之八と謂ふとなすなり。左傳の註又曰はく

陸粲云。劉禹錫董生の說を稱して曰く、蓍を揲るは九と六と老となす。老、變爻となす。七と八と少と爲す。少定位と爲す。國語、晉ゑ子筮、貞屯悔豫皆八を得、變爻に非ざる故に之く所有るを曰はず、穆姜筮、艮八に之くに遇ふ。史曰く、是

艮隨に之くと謂ふ。夫れ艮隨に之く、唯二動かす。斯れ八に遇ふ。餘五位皆九六。故に反す。筮法少を以て卦主と爲す。若し定は五にして變一、卽ち宜しく某卦に之くと曰ふべし。觀、否に之き、師、臨に之くの類是なり。今變は五、定は一、宜しく少に從て占ふべし。艮の六二に曰く、其腓に艮る、其の隨を拯せず、其の心快からず、史此に遇ふを以て利あらずと爲す。故に變爻に從ひて占ふ。曰く、是れ艮隨に之くと謂ふ。苟以て予姜を說くのみ。而して、杜元凱以て三易を雜用す。故に八に遇ふの言有るは非なり。衡案。春秋內外傳に八を言ふ者二、一卽ち此れ艮隨に之く、五爻皆變ず。唯六二變せず、筮法少を以て卦主と爲さば、則ち艮八に之く、義知り易きなり。其二晉語に在り、曰く貞屯晦豫皆八を得るなり。蓋し、連山歸藏の法、遇卦を貞と曰ふ。貞、貞は、松貞、女の貞の如し、故に、不變と謂ふ。之卦を悔と曰ふ、悔は則ち改むる也。故に之卦を悔と曰ふ。屯豫に之く。初九九四六五皆變じ、六二六三上六皆變せず。是れ變せざる者皆八にして七無し。故に八と云ふ。韋昭內傳、蠱の貞は山其晦風に據りて云ふ。內を貞とし、外を悔とす。震屯に在れは貞とし、豫に在れば悔とす。八は震の兩陰爻を謂ふ。貞に在り、

悔に在り皆動かざれば則ち何んぞ獨り六二六三を遺さん。其說通ず可らず。又曰く、泰八に之くを得、下文之を占ふ。曰く是を天地配享、小往大來と謂ふ。專ら泰象に依て、之を言へば則ち六爻皆變せず。然らば則ち唯陰少を得る耳ならず、陽亦少を得、泰卦三陰三陽、其數又同じ、必ず八を言ふは、蓋し、陽動いて陰靜か也。動者の變、乃ち是れ其常、靜者の變則ち其の性を失ふ、二易既に變せざる者を以て占ふ。尤も陰不變を貴ぶ。故に七と言はずして八と云ふか。

日知錄に曰はく

易に七八九六有りて爻但九六を繫るは、隅を擧ぐるの義なり。故に、其の例を乾坤二卦に發す。曰く用九、用六は其變を用うるなり。亦其の不變を用うる者有り。春秋傳穆姜、艮八に之くに遇ふ。晉語董因泰八に之くを得、是なり。今即ち艮を以て之を言ふ。二爻獨り變ずれば則ち六に之くと名づく。餘皆變じ二爻獨り變せざれば則ち八に之くと名づく。是れ知る乾坤亦用七用八の時有るを乾爻皆變じて初獨變せず。初七潛龍勿用可なり。爻皆變じ初獨り變せず。初八霜を履み堅氷至ると曰ふ可なり。變を占ふは其の常なり。不變を占ふは其の反なり。故に聖人を之九六を繫ぐ。歐陽永叔曰く、易の道は其の變を占ふ。故に其の占ふ所の者を以て爻と名づく。六爻皆九六と謂はざるなりと。之を得たり。

左國易一家言に曰はく。

其連山歸藏、七八を以て占を爲す。故に不變を主とす。周易九六を以て占を爲す。故に變を主とする也。今艮、隨に之くに由り之を言ふ。初四、五と六を得て變ず。此陰、陽に變ずるなり。三上と九を得て變ず。此陽、陰に變ずるなり。唯二、八を得て變せず。故に八に之くと曰ふ也。蓋し、連歸の二易、七を得る者は、吉と爲し、八を得る者は凶と爲す。七八合得する者は、吉凶相半と爲す。夫れ七は少陽なり。陽の道たるや、開いて通ず爲す有るなり。是を以て吉と爲す。夫八は少陰なり。陰の道と爲るや、閉ぢて塞ぐ。爲す無きなり。是を以て凶と爲す。夫れト筮、固より四千九十六の變有りて、二易之を統べ、七を得、八を得、七八合得の三法を以す。以て天下の事を占ふ。之を周易に鑒み、其郁文の美に及ばず雖も、二易亦簡の占法なるかな。今艮二易書皆亡ぶ、其の詳考ふべからざるなり。今八に之くに遇ふ。其の八を得るは、此れ閉ぢて塞ぎ、爲すなきの凶と爲すなり。

又曰はく

蓋し泰八に之くは、之を艮八に之くに徵し、其の五爻皆變ず。唯一爻八を得るは變せざるなり。亦察すべし。按ずるに、泰八に之く者は、觀晉萃の三有るなり。

又曰はく

今夫れ貞屯晦豫。初め五は九を得て變ず四は六を得て變ず二三り上皆八を得て變せず。故に皆八と曰ふ。

八が不變爻に關係あるとは疑ふ可らず。艮䷳の隨䷐に之くを名けて之八と曰ふ。不變爻は六二の一爻あるのみにして三十二等にて出で、八なり。泰䷊の八に之くや何れの爻が不變なるやを知ること能はず。屯の豫に變せし如き場合にも亦「之八」といふ。艮の隨に變せし場合にも「之八」といふ。即ち屯の豫に之きし時は六二、六三、上六皆八なり。故に皆八といふ。由是觀之、一爻不變の時にのみ「之八」といふにはあらで、陰爻の不變なるものに就ては其の數の二三なるを問はず。常に之八といふなり。然らば何故に之八といふかといふに、不變爻を以て筮せんとするに在るのみ。連山歸藏に於ては恐くは此種の筮法ありしなるべし。

第十一節　易の年代に就て

支那社會の中心的人種は漢人種なり。漢人種は固中央亞細亞の高原に住し、牧畜を以て業となし、水草を追うて轉移しつゝありき。諸侯を群牧と云ひ、政治を牧民と云ふは是れが爲めなり。黃河を下り其兩岸に上陸し茲に牛羊を棄てゝ以て耕作に從事するに至れり。支那古代に伏犧氏あり神農氏あるは即ち此の時代の變遷を示めすものゝ如し。即ち伏犧氏の犧の字は牛偏を有し、牛羊に關係あることを示す者なり。伏犧氏は中央亞細亞の高原に住して牧畜に從事し、神農氏は黃河の下流に住して耕作に從事しつゝありしなり。蓋し伏羲氏と云ひ、神農氏と云ふは、一人の名稱にあらず、部落の名稱なり。支那の古史に據るに伏羲氏と云ひ神農氏と云ひ、凡て何々氏と言ふもの、其作りし所の文明の種類甚だ多し。今其一二例を示めすと左の如し。

伏羲氏の國には

一、八卦六十四卦を作りしこと

二、文字を作りて結繩の政に代へしこと
三、甲曆を作りしこと
四、嫁娶の禮を制せしこと
五、二七弦の琴三六弦の瑟を作りしこと

神農氏の國には
一、耒耜を作り五穀を植ゑしこと
二、藥を作りしこと
三、日中に市をなせしこと

女媧氏の國には
一、笙簧を作りしこと
二、都良筦を制せしこと
三、五十弦の瑟を作り、後二十五絃に更めしこと

軒轅氏の國には
一、甲子を作りしこと

二、蓋子を作りしこと
三、算數を作りしこと
四、律呂を作りしこと
五、十二鐘を作りしこと
六、咸池の樂を作りしこと
七、星氣を占せしこと
八、冕を作り、玄衣黃裳を作り、五采を染めしこと
九、舟楫を作りしこと
十、宮室の制を作りしこと
十一、金刀を制し五幣を立てしこと
十二、民に蠶を教へしこと
十三、州を分ちしこと

金天氏の國には
一、大涌の樂を作りしこと

高陽氏の國には

一、曆を作りしこと

二、承雲の樂を作りしこと

高辛氏の國には

一、九招の樂を作りしこと

等あり。自己の見る所を以つてすれは此等の文明は決して一人の力によりて出來得べきものにあらず。必ず多數の人の力を結合して以て作成したる者ならざる可らず。殊に藥劑に至りては多くの年月を費やし、多數の經驗を積み社會的產物として生じたるものならざるべからず。更に他の方面より考ふるに數千年前なる歷史上の事實は茫漠として知る能はざるに至る。其の際に當り最も克く後世に印象を止むる所のものは何んぞやと云ふに、英雄の勢力か、然らざれば團體の勢力なり支那古代に於て諸種の團體は相互に併立しつゝありき。卽ち此の時代に於ては英雄の勢力と言はんよりは寧ろ團體の勢力を以て影響多きものとなす。近く之を譬ふれば我國よりして、支那朝鮮の文明を觀察せんには單に如何

なる文明の發生せしかを知るのみにて、如何なる人の之れを作りしかを省みることなし。伏羲氏と云ひ神農氏と云へるが如きも此類ならん。卽ち團體の名稱にはあらざるか。此れ等の諸方面より總合して吾人は伏羲氏神農氏は共に是れ時代の代表的名稱なりとす。換言すれば牧畜時代ありしことを稱して、伏羲氏とし、此の時代に於て前述の如き諸種の文明を生じ又耕作時代なりしことを想像し之を神農氏と名け、此時代に於て前述の如き諸種の文明を生じ、從つて伏羲氏は單に時代を示し、神農氏も亦時代を示し居るものなるべし。

今易に關する普通の傳說によれば其製作は實に伏羲氏に在り、之を以て事實とすれば易は漢人種が中央亞細亞の高原に住居する時に作られたるものなり。ラクーペリーが、バビロニアより來りしと云ふ說も何分か取る所あるが如く思はる。

第十二節　天興神物

占筮の儀式は周の頃には一定し、王侯大夫士各々多少の差異を有せり。筮室あり、戸を南にす、筮案を室の中央に設け蓍を其の上に載せ南面に象る。筮席を其の東に設けて西面す、筮者案の南に就きて北面し、左手下韇を執り右手上韇を抽き上韇は之を其の儘案上に置き下韇は蓍を容れたる儘右へ還りて、筮席に就く。左手にて下韇より蓍を抽き右手に蓍を持して以て韇を擊つ。鄭玄の註に據れば之を擊て以て其の神を動かすなり命じて曰はく。

爾泰筮常あるを假る、今何々せん尚くは饗けよ

此の文に付ても、種々の形式あり、次ぎに之を述ぶべし。言ひ畢りて而して後蓍を措て用ひす、四十九策を手に信せて二分し分掛揲歸式の如し、三變の後過揲の策を四除し、以て爻の陰陽を定む。之を地に劃す。今日ニアリテハ爻ヲ置ク 十八變して六爻を得六　を得たる後一切の策を合し、左手にて之を下爻網め案前に就き北面して上爻を復し以て筮を終ふ。今命の形式の種類を述ること左の如し。

爻の大筮常あるを假る。孝孫某某日丁亥用て歳事を皇祖伯某に爲む某の妃を以て某氏を配す。某の某を以て尸となす。尚くは饗けよ。

此れ大夫の禮なり又曰はく

孝孫某來日某を筮す。此の某の事を諏る。其の皇祖某子に通せよ。尚くは饗けよ。

此れ士の禮なり、孔成子周易を以て之を筮して曰はく尚くは衛國に享けて其の社稷に主たらん。左傳 重耳晉國を有んことを筮して曰はく尚くは晉國を有たん是れ等は簡單にして要を得たりと謂ふべし。或は曰はく

爾の泰筮常あるを假る。某官姓名今某事云云未だ可否を知らず。爰に疑ふ所を以て神に質す。吉凶得失唯だ有神尚くは明かに之を告げよ。

今特牲饋食禮士冠禮等に見ゆる者を擧げて以て參考に供す。必ずしも之に由るべしとなすにはあらざるなり。

士冠禮廟門に筮す。主人玄冠朝服。緇帶素衣位に門の東に卽き。西面す。有司主人の服の如くし。位に西方に卽き。東面北上す。筮と席と卦する所の者。具に西塾に饌

す。席を門中閫の西門の外に布き西面す。筮人筴を執り上筮を抽き之を兼執つて命を主人に受く。宰、右より少く、退き命を贊す、筮人許諾し右還して席に卽いて坐し、西面す。卦者左に在り筮を卒り、卦を書し執つて以て主人に示す。主人受けて之を反す。筮人還り東面し、旅占卒つて進んで吉を告ぐ。若し吉ならざれば、則ち遠日を筮すると初の儀の如し。筮席を徹し宗人事畢るを告ぐ。

特牲饋食の禮日を諏らず日を筮するに及んで主人端玄を冠し位に門外に卽き西面す。子姓兄弟主人の服の如くし、主人の南に立ち、西面北上す。有司群執事兄弟の服の如くし、東面北上す。門中閫西閾外に席す。筮人筮を西塾に取り、之を執り、東面して命を主人に受く宰、主人の左より命を贊す。

命に曰はく孝孫某來日某を筮し此の某の事を諏り其皇祖某の子に適く尙くは饗けよ。筮者許諾し、還つて席に卽き西面して坐す卦者左に在り筮を卒へ卦を寫し筮者執つて以て主人に示す。主人受け視て之を反す。筮者還つて東面す。占ひ卒り。主人に占を告げて曰はく

吉と

若し吉ならざれば則ち遠日を筮すると初の儀の如し。宗人事畢るを告ぐ。期に前つ三日の朝戸を筮する日を求るの儀の如し。

筮に命じて曰はく孝孫某此の某の事を諏り其の皇祖某子に適き某の某を筮して尸と爲す。尙くは饗けよと。

乃ち尸を宿す。主人戸の外門外に立つ。子姓兄弟主人の後に立ち、北面東上す。尸は主人の服の如し、門を出でゝ左し。西面す主人辞す。皆東面北上す主人再拜す。尸答拜す。宗人辞を擯する初の如し。卒りに曰はく子を筮して某尸と爲す。占に曰はく吉なり。敢て宿す。祝許諾し、命を致す。尸許諾す。主人再拜稽首す。尸入る。主人退く。

少牢饋食禮日は丁巳を用ひ、旬有一日を筮す。廟門の外に筮す。主人朝服して門東に西面す。史朝服して左に筮を執り、右に上韇を抽き兼ねて筮と與に之を執り、東面して命を主人に受く。

主人曰はく孝孫某來日丁亥用て歲事を皇祖伯某に爲め某の妃を以て某氏を配す尙くは饗けよ。

史曰はく諾と。門西に西面し、下韇を抽き左に筮を執り右に韇を兼ね執り以て

筮を擊つ遂に命を述べて曰はく

爾の大筮常有るを假る。孝孫某來日丁亥用て歳事を皇祖伯某に薦め某の妃を以て某氏を配す尚くは饗けよ。

乃ち韇を釋き立てゝ筮す筮者左に在り。筮し卦木を以てす。筮を卒へ乃ち卦を木に書し、主人に示し。乃ち退いて占す。吉なれば則ち史筮を得、史卦と卦とを兼執つて以て主人に占を告げて曰はく

從ふと乃ち、官戒宗人滌を命じ、宰命して酒を爲し、乃ち退く。若し吉ならざれば則ち遠日に及んで、又日を筮すると初の如し。

要するに筮儀の一條に於ては、何等今日に應用せらるべき眞理を發見せず。只だ古代禮儀の觀念の盛なりし時の一產物として見るべきのみ。這般の筮儀が存在せざるにせよ易の眞理が消滅し又は縮少するにはあらず。筮儀は歴史的蛇足に外ならざるなり。

第十三節　考變占

一、朱子の說

十八變の筮法に由りて六爻を得。然るに其の全体六爻皆變せざる場合あり。皆變ずる場合あり、一爻のみ變ずる場合あり。二爻以上變ずる場合あり。爻の變ずるは占筮と如何なる關係ありや、是れ本節の論せんとする所なり。朱子の啓蒙は其の說最も備はるが故に先づ之を述べ、而して後他說に及ばんとす。朱子の說は左の如し。

一、六爻共に變せざれば則ち本卦（卽ち今得たる卦なり）の彖の辭を以て占ふ。彖の辭とは卦の全体に就て文王の述べたりとせらるゝ所の者なり、而して內卦を以て貞となし、外卦を悔となす。玉齋の說に據れば大抵筮法、變爻あるときは本卦を以て貞となし、之卦を以て悔とす。變爻なきときは內卦を以て貞となし、外卦を悔となすなり。貞は現在の狀態に名け、悔は其の變じたる狀態に命ずるなり。（啓蒙卷上、末、卷通釋二、十三ヲ）

二、或る一爻變ずるのみなるときは本卦の變爻の辭を以て占ふ。

三、或る二爻變ずるときは本卦の二變爻の辭を以て占ふ。仍りて上爻を以て主となす、其の然る所以は朱子の說に據れば凡そ變は其の變の極まる所に付て見むことを要す。下を少となし、上を老となす。故に上を以て主となす也

四、或る三爻變ずるときは本卦及び之卦の彖の辭を以て占ふ。而して本卦を以て貞となし、之卦を悔となす。其の故何んぞや、通釋の說に據れば三爻變ずるときは變せざる爻と各々三爻にして六爻平分す。故に兩卦の彖辭を以て占ひ、本卦を以て貞となし、之卦を悔となすなり。其の三爻變ずれば則ち卦の數凡そ二十あり。其の排列の順序は朱子の啓蒙に據れば下の變ずる多き者を先づ列し下の變ずる多き者を後に列す。圖に就て見るべし。若し變卦が前の十卦の中の一なるときは兩卦の彖辭を以て占ふと雖も本卦を以て主となす。若し後の十卦の中にあるときは之卦を以て主となす。是れ其の故如何と云ふに、朱子の意を察するに左の如し、即ち前の十卦は變ずるもの卦の下方にあり、變の始めなり。後の十卦は之に反し、變ずる者の卦上方にあり。變の終りなり。故に前十卦は主として未だ變せざる以前の本卦に就て占し、後の十卦は變卦を主とするなり。

五、四爻變ずるときは之卦の二つの不變爻を以て占ひ、下爻を以て主となす、是れに付ては朱子の解なし。敢て强解せず。但だ二爻變の場合と對照すれば則ち其の正反對なるを見るべし、二爻變は六爻の中變ずる者少し。四爻變は變ずる者多し、故に前の場合に於ては本卦に付て占ひ、後の場合に於ては之卦に付て占ふ。前の場合に於ては本卦の變爻の辭にて占ひ、後の場合に於ては之卦の不變爻の辭にて占ふ。又前の場合に於ては上爻を以て主となし、後の場合に於ては下爻を以て主となす。

六、五爻變ずれば之卦の不變爻を以て占ふ。此れに付ても前と同く一爻變の場合を參照すべし。强解せず。

七、六爻皆變ずる場合には乾坤は二用を以て占ふ。即ち乾が坤に之くときは乾の用九の辭を用ひ、坤が乾に之くときは坤の用六の辭を用ふ。其の他の六十二卦に在りては之卦の彖辭を以て占ふ。按ずるに左傳昭公二十九年蔡墨

魏獻子に答へて曰はく、乾坤に之く、曰はく群龍の首无きを見る吉なりと。卽ち用九用六を用ふるは古代にありし如し。

朱子は更に附記して曰はく。

是に於て一卦は六十四卦に變ずべく、而して四千九十六卦は其の中に在り。(64×64＝4096) 所謂「引て之を伸べ、類に觸れて之を長ずれば天下の能事畢る」もの豈信ならずや。今六十四卦の變を以て列して三十二圖となす。(各圖は之を下より見るときは更に他の一圖となる。故に三十二圖、卽ち六十四卦の變となるなり。)初卦を得る者（卽ち圖の上部の卦を得る者）は初めよりして終り、上よりして下なり。（其の變爻の漸次に動きつゝあるを云ふ。）末卦を得る者（卽ち圖の下部の卦を得る者）は終りよりして始め下よりし上なり。（其の變爻の然か動きつゝあるを云ふ）變が第三十二卦以前にある者（一爻、二爻、三爻變前十卦なる者の三種なり。）は本卦爻の辭にて占ひ、變が第三十二卦以後にある者は變卦爻の辭を以て占ふ。

凡そ卦爻の辭にて占するとするも、其の辭は甚だ僅少にして一切の事に應ずる能はず。例へば乾の初爻は「潛龍用ふる勿れ」とあるのみ。此れのみにして其の應用甚だ少し。

二、劉雲莊の說

然らば則ち如何せば可なるや。之に付て劉雲莊が曰はく。

筮法は卦爻の辭を以て占ふ。然るに其の辭の事と應ずる者は吉凶を判斷し得べし。又辭と事と應せざる者あり、此の時吉凶を決するは何に由るか。蓋し人、周易の辭の上にて會せんとする者は淺薄にして卦の象の上にて會せんとする者は深遠なり。伏羲氏の人にト筮を教ふるや、但だ卦あるのみ、文辭なし。其の遇ふ所に隨ひ、之を「卦體」「卦象」「卦變」に求む。而して應せざる者なし。文王周公の辭は以て卦を明かにするなりと雖も然るに辭の該ぬる所、終に限りあり。故に時ありて而して應せず。必ずや左傳及び國語載する所の如く「卦體」「卦象」「卦變」を以て占ひ、又互體を推し、始めて以て辭の及ばざる所を濟ふに足る。而して吉凶を前知すべし。易を讀む者察せざる可らざるなり。

前きに八卦の象に付て述べし所の如きは盡く之を應用し來りて以て占考に用ふべきなり。

三、太宰純の說

朱子の說は甚だ精密なり、然れども古代何れの時代に此の說ありしや。朱子自身も之を證明すること能はざるべし。朱子は單に自己の見識を立てしのみ。古代此の法ありしと謂ふにあらざるなり。朱子の說に對する太宰純の批評に曰はく。

晦菴、用九用六の辭に依りて推して六十四卦の占法を知り且つ之を春秋傳に考へて以て之れが法を立つ。明にして且つ備れりと謂ふべし。然れども其の中一二の猶ほ曉る可らざる者あり。曰はく、二爻變ずれば則ち本卦の二變爻の辭を以て占ふ。仍りて上爻を以て主となすと。此れ晦菴意を以て之を言ふなり。夫れ諸卦六爻其の辭同からず、吉凶も亦異なれり。若し變ずる所の二爻、一は吉にして一は凶ならば、則ち何れにか適從する所あらん。果して上爻を以て主となさば則ち下爻を如何せん。若し二爻を兼ね取らば則ち何を以て疑を決せん。此れ其の曉る可らざる者の一なり。曰はく、三爻變ずれば則ち本卦及び之卦の彖辭を占ひ、而して本卦を以て貞となし、之卦を悔となす。前十卦は貞を主とり、後十卦は悔を主るとと。夫れ六爻皆變ぜざる者は本卦の彖辭を用ひ、六爻皆變ずる者は之卦の彖辭を用ふ。此れ當然の法なり。此の外彖辭を用ふることある可らず。一彖辭を兩用ずるは斷を爲す所以にあらざるなり。此れ其の曉る可らざる者二なり。程沙隨が引く所、貞は屯、悔は豫皆八なるもの。國語にありて本と曉る可らざること、之を闕て可なり。前十卦、後十卦の說も亦晦菴の意見、信ずるに足らざるなり。

曰はく。四爻變ずれば則ち之卦の二つの不變爻を以て占ふ。仍りて下爻を以て主となすと。此れ亦晦菴意を以て之を言ふのみ。二不變爻の一、吉にして一凶ならば則ち何れにか適從する所あらん。果して下爻を以て主となさば則ち上爻を如何せん。若し二爻を兼ね取らば則ち何を以て疑を決せん、且つ易は必ず其の變を占ふ。變ずる者を捨てゝ變せざる者を用ひて以て占ふも亦宜き所にあらざるなり。朝鮮の李退溪之を疑ふ。予も亦之を疑ふ。此れ其の曉る可らざる者三なり。

曰はく。五爻變ずれば則ち之卦の不變爻を以て占ふと。此れも亦晦菴意を以て之を言ふのみ。然れども予以爲らく、衆動くは則ち必ず一の不動の者あり

て之を主とる。今五爻變じて而して一爻變せざれば不變爻を以て占べし。一爻變じて本卦の變爻を以て占ふ。卽ち一爻變せざるのみなるときは之卦の不變爻を以て占ふべきなり、故に此の一例は晦庵の言に從ふを是となすべし。

此く批評し、去りて更に論じて曰はく。

注に春秋傳の艮の八に之くに遇ふを引く。若し下文の「史曰是謂艮之隨」なければ所謂艮の八に之くは何の卦たるを知る可らざるなり。杜注にも明解なし。凡左氏の記する所當時筮者の言、當さに其の法あるべし、恐くは商瞿が傳ふる所の孔氏易是れのみ、後世其の法傳はらず。故に史傳を讀む者、能く其の義を曉るなし。晦庵專ら卦爻の辭を以て占を爲さんと欲す。然れども人事窮り無く、而して辭には局る所あり。何んぞ能く人事の變を盡くさん。故に筮者象を觀て以て占を爲すに如くはなし。而して辭に吉凶悔吝あり。以て斷を爲すべきのみ。納甲飛伏の若きに至りては其の起る所を知らずと雖も、蓋し鬼谷子の徒より傳はる。而して漢儒之を用ふ。今人之を用ふるも亦効を奏す。豈

古法を以て之を斥くべけんや。夫れ易は廣し、大なり。故に近世の卜筮家附會するに雜家の言を以てし、猶ほ能く占斷す。況んや漢魏以來先哲の用ふる所なるをや。夫れ易の本は象數にあり、故に筮者當さに先づ象數を明かにし、次ぎに納甲飛伏、孤虛旺相を考へ、以て其の事を占ひ、然して後斷ずるに卦爻の辭を以てすべし。

其占筮を過信するが如きは固より一種の誤想に外ならずと雖も言辭以外に其占を求むるは注意すべき所なり。而して詳かに占法を示めして曰はく。

所謂六爻皆變せざる者は本卦の彖辭を取り、六爻皆變ずる者は之卦の彖辭を取り、一爻變ずる者は本卦の變爻の辭を取り、五爻變ずる者は之卦の不變爻の辭を取り、餘は卦爻の辭を取らず。（象數に由りて判斷せんとするなり。）

是を定法となす。今人、占法亡るの後に生れ、筮して以て疑を決せんと欲す。亦難からずや。故に予自ら揣らす。嘗て竊かに古人の遺法を考へ以て一家の占法を立つ。庶くは人事の變を盡くすに庶からんことを、若し有識者責るに杜撰を以てせば亦逃るゝ所なしと云ふ。易道撮乱

要之朱子の說に就て二爻三爻四爻變を削除し之に代ふるに象數を占ふの義を以てしたるなり。又太宰氏の說に據るも占法は已に全く亡びたるなり、

四、井上金峨の說

井上金峨の易學辨疑は朱子と太宰氏との說を併せ評したる者なり。曰はく。

凡そ卦の六爻皆變せざれば則ち本卦の彖辭を以て占ひ、內卦を以て貞となし、外卦を悔となす、仲晦因りて「左傳孔成子筮して屯に遇ふ」を引く。誠に是なり。而して家語載する所を觀るに孔子筮して「賁」を得、則ち曰はく山下に火ある、之を賁と謂ふ。正色の卦にあらざるなりと、占辭にあらずと雖も而かも亦一卦に就て之を言ふや必ずしも彖辭を取らざるを見るべきのみ。

二爻變と四爻變との占法に付ては經傳に文なし、仲晦例を以て之を推す。是なりとす。惟だ二爻變は則ち本卦の二變爻の辭を以て占ひ、仍りて上爻を以て主となす。假りに上下の爻をして一は吉一は凶ならしめば何を以て疑を決せん。此れ後世の議を來す所以なり。余は則ち謂へらく、古人の占法、卦爻の辭を取りて以て斷をなすと雖も亦或は卦の通體に就き、或は其の爻を互ひに、以て詳かに其の義を論ず。左氏記する所以て觀るべし、古法既に滅し經に明證なし、且つ朱子に從ふも亦可、如し能く其の象數を觀、之を本之二卦に參へ、之を上下二變爻に考へ因りて以て占斷を爲さば則ち一吉一凶ありと雖も亦傷まんや。

四爻變すれば則ち之卦の二不變爻を以て占ひ、仍りて下爻を以て主となす、德夫謂はく、易必ず其の變を占ふ、變する者を捨てゝ不變の者を用ひて之を占ふは宜き所にあらざるなりと。夫れ五變爻のとき既に之卦の不變爻を以て占へば則ち四爻變のとき之卦の二不變爻を以て占ふも亦何んぞ怪まん。衆動けば則ち必ず一の不動の者あり之を主とると、德夫も亦意を以て之を言ふのみ、何んぞ獨り仲晦を罪せん。

又曰く

三爻變すれば則ち本卦及び之卦の彖辭を以て占ふ、國語に依りて斷をなす、仲晦の說是なり、德夫の之を辨ずるは誤りなり。而かも所謂「前十卦後十卦」なるものは則ち其の朱子ヲ指スヲ家言のみ固より信據するに足らざるなり。

德夫謂はく、二爻變三爻變四爻變は皆卦爻の辭を取らず、惟だ先づ象數を明かにし、次ぎに納甲飛伏、孤虛王相を考へ、以て其の事を占ひ、然る後斷ずるに卦爻の辭を以てすべしと、此れ其の意蓋だし仲晦が專ら卦爻の辭を以て占はんとするを非なりとなすなり。夫れ古人固より專ら卦爻の辭を取らず。一卦の通體に就きて其の象數を觀て以て占斷をなす、則ち此れ誠に以て定法となすべし、納甲飛伏孤虛王相の如き、原と術數に出づ、妄誕不經、漢儒往々此れを以て古書を讀む誤りある所以なり、德夫が輩其の師說を奉し、自ら喜むで古を信じ、每に宋儒の穿鑿附會を譏り、而かも此れを取りて以て占法を立つ、何の故なるを知らず。且つ史傳載する所、記事の次、勢ひ及ばざるを得ず、故に備はる者あり、遺れる者あり、豈筮法のためにして之を發せんや、今徒らに其の備はる者を觀、而して之を遺れる者に推すを知らず、旁ら不經の說を取り、以て之を緣飾す、妄にあらざれば則ち愚、易を知らざる者と謂ふべし、悲いかな。

要之、古法亡びたる以上は且らく朱子の說に從ふも可なりとす。而して前十卦後十卦の說の外は朱子に左袒したり、殊に太宰氏等が宋儒の說を排しながら獨り占法に於て此の法に據るを怪む。

五　龍山の說

一方に於て谷川龍山は甚だしく朱子の說を排せり、曰はく。

彖爻の辭なるものは聖人其の象を觀て以て君子に敎ふるの辭にして常道を說けり、占事は權道にして其の卦に於るや常象なく其の占に於るや常義なし、唯だ窮理を察し、卦象に由りて其の吉凶を決す、故に占は其の卦象を主として彖爻を用ふることなし、故に占事來を知ると云ひ、數を極めて來を知るこれを占と謂ふと云ひ、動けば則ち其の變を觀て其の占を玩ぶと云ふ、彖爻を以て占することは大傳通篇一言一句もあることなし、知るべし占は不變變卦共に其の象によりて占するにあることを、夫れ天下の事物無窮なる故に占事も亦無盡なり、豈彖辭六十四章、爻辭三百八十四章を以て天下の至錯を盡くすことあらんや、此れ大傳に彖爻を以て占とすることを說きたまはざる所以なり、但だし彖爻は常道にして占辭に非ることは別說あり、言長

ければ爰に畧す。考占（朱子作）に左國の占例を引て證すといへども左國は悉く占者の意味ありて其の爻辭を引ける者は唯だ其の占を徵するのみなり故に其の占の爻辭に合はざる者は徵とせず。是の故に左傳屯の初九變を得て其の爻辭を用ひず、又蠱復不變の卦を得て其の彖辭を用ひず、此れ其の辭を主とせざること見るべし、考占の如きは占者の意味あることを知らず、唯だ彖爻を以て占辭となす、柱に膠するの說なり、其の詳かなることは左國易一家言に載せたれば爰に略す。（周易本筮考變占辨）

此の說に據れば古の筮法必ずしも彖爻の辭に據らざるなり、占に合ひし辭あるとき引きて以て徵となすに過ぎず、占は專ら「卦象」に據るべきのみ。

六、胡一桂の說

朱子の說は餘まり詳密にして且つ專ら彖爻の辭によりて占はんとするは頗る狹隘なるが故に支那に於ても早く諸家の疑ひを惹起せり、胡一桂が曰はく。

啓蒙の一爻變を觀るに畢萬が筮する所を引て之を證せり。今を以て之を觀れば未だ嘗て之卦を取らざるはあらず。且つ特に一爻を論ずるのみにあらず兼ねて貞悔の卦體を取る。是れ占筮法となすべきに似たり、陳の厲公子完の生を筮するを觀て尤も見るべきなり、二爻變に付ては陳摶宋の太祖のために占ひしとき、諸爻と卦體とをも參考せり、三爻變に付ては啓蒙は但だ本卦之卦の彖辭を以て占ふと云ふ、みなれども晉侯屯豫の占ひを以て見れば則ち卦體を并せ考ふることと見るべきなり。要之、卦體并び他にの爻をも參考するは左傳の古法なりとなすなり。

七、周易折中の說

周易折中に曰はく。

朱子の三十二圖は、其の次第最も詳密となす、而して後學の疑義二あり、一に曰はく筮法九六を用ひて七八を用ひず、今四爻五爻變は之卦の不變爻を以て占ふ、則ち是れ兼ねて七八を用ふるなり。如何、二に曰はく、周公未だ爻を繫けざるの先き彖辭の用は周からざる所あり、三代の筮法既に盡く傳はらず、今惟だ經傳を以て據となして之を推せば則ち用九用六の說經文に明かなり、而かも七八を用ふる者は諸書に皆明文なし、惟だ杜預以爲く、夏商之を用

ふと、先儒已に其の非なるを摘せり。之を春秋內外傳に攻ふるに變と不變と變の多寡とを論ずるなく皆卦の體象と其の彖辭とを論ず。卽ち一爻變のときは、爻辭を以て占ふと雖も、而も亦た必ず先づ卦の體象と其の彖辭とを以て主となす。則ち古人の占法たる、未だ爻辭あらざりしときは彖辭のみを用ひしを知るなり。既に爻辭あるの後は則ち但だ專ら動く者を以て占ふ。而かも亦初めより彖辭を離れて以て斷ぜざるなり。惟其の一卦變じて六十四卦となるべきが故に之卦得卦の兩卦を參考して以て事物の理を盡くすべし。故に卦の變ある者は生卦（全體ノ一卦ノコトヲ主として成爻を主とせず。爻の變せるときは專ら動けば則ち占あり、雜り動けば則ち占なし。是くの如くなれば則ち傳記の文皆合し而して學者の疑ひ釋くべし。內外傳に八を得ると云ふ者に至りては一に曰はく、泰八に之くと。則ち變せざる者なり。一に曰はく、貞は屯悔は豫皆八と。則ち三爻變ずる者なり。一に曰はく、艮八に之くと、艮隨に之くとなす。則ち五爻變せるなり。諸儒八を以て不動の爻となす。之を文意に攻ふるに未だ符協せざるに似たり。蓋だし三占は變數不同と雖も然かも皆專動の爻なければ則ち其の卦を用ふるとなすは一なり。卦は八を以て成る。故に八を以て卦の標識とす。猶爻は九六を以て成るが故に九六を以て爻の標識となす如きなり。朱子の圖を見る者は更らに須らく左傳國語諸書を以て互ひに相ひ參攻すべし。

八、江永の說

而して河洛精蘊の著者も前二說を引用し、之に左袒したり。先づ朱子の卦變三十二圖を排し、更に謂て曰はく。

變卦の序條理精密と雖も卦を占ふの時、取り用ふる所なきに似たり。爻變ずる者あれば本卦を貞となし、之卦を悔となす。前きに言ふ。（朱子ナリ）三爻變の卦二十あり。前十卦は貞を主とし、後十卦は悔を主とすと。前十卦は初爻變せざる者なり、後十卦は初爻皆變ずる者なり、占者豈必ず此れを以て圖を按じ、其の主たると主たらざるとを定めんや。朱子の意、是を以て定めて占例となし、占者をして疑惑する所なからしめんと欲す。然れども易道は其の變を尙ぶ。占者は時に隨て變通せざる可らず。或は分ち或は合し、或は取り、或は舍つ、或は

專ら主とし、或は旁及す。例を以て求む可らず、如し例に拘はらば恐くは辭に滯泥あり、未だ必ずしも鬼神と其の吉凶を合せず。胡氏の言、占法を補ふべし。折中論の尤も精なる。學者の二疑を釋くべし。

畢竟するに河洛精蘊の著者は又曰はく。

今揲錢の卦、五爻變する者に遇へば、或は獨靜の爻に應じ、或は亦壹く然らず。著卦例を以て定め難し。其の爻、辭の事と合する者を視て之を用ふべし如し。合せざれば二卦の體象或は互卦と之卦との象辭を占ふ可なり。象辭を占ふ者も亦體象と互卦とを兼ぬべきなり。

九、結論

吾人は此れ以上の引用を以て必要とせず。歸する所は古占法を知らんとするには左傳國語の筮を以て標準とないすべしと謂ふに在り。然れども之を標準とないすと人々同からず。要するに周易折中を以て其の中庸を得たる者となすべし。此說に據れば、凡て占筮は卦象卦體と彖辭とを以て參考すべしとなり。

第四章　易の應用

第一節　相談對手

凡そ人は何事をなすにも相談相手なかる可らず、己れ獨りの考へにてなしたることは往々にして後悔することあり。而して相談對手となるものは老人なるを宜しとす、老人は世故を經由して常識が發達し居ればなり。常識の發達といふことが最も必要なり、此點に於て余は易を以て一種の相談對手となすを好む。易の作者は其の當時にありては比較的に世故に長けたるものなるべく易經其者は人生各種の方面を網羅して能く人情を穿てるものあり。故に易經を以て相談對手となすべしとは余が宿論なり。其方法如何といふに余が分類せるが如き順序に從て六十四卦を排列し、之を一冊に纏め置くなり。今結婚に就いて疑ふ所あれば結婚に關する部分を開き、前後參照して以て其の意見を定む。其他類推すべし。然かする時は占筮を用ふるとなく、直ちに其の所を披き得るなり。固より平生

熟讀し、之を腦中に收め置けば一々披き見るの要なし。然れども相談對手とするといふ點は乃ち一なり、若し別に一室を築きて之を易室と名け、金裝せる易經(而かも余が排列せる)一冊を卓上に乗せ何か事ある毎に入りて之を問ふが如きは要するに好事者のことにして一概に贊成すべきにあらず。然れども亦害もなきなり。

兎に角此の如く易を使用するは最も妥當なる見解なるべし、易は人情を描けるものなれば人情を知了することを勉むるは第一必要事なり。卽ち之を以て老人と見做し、常識家と見做し、一切事に對し、最も正直なる意味に於る相談對手となすなり。王充論衡に曰はく、

子路、孔子に問ふて曰はく。猪肩羊膊も以て兆を得べし。蒿草藁茅も以て數を得べし、何んぞ必ずしも蓍龜を以てせん、孔子曰く、然らず、蓋し其名を取るなり、夫れ蓍の言たるや耆なり、龜の言たるや舊なり、孤疑の事を明かにするには當さに耆舊に問ふべきなりと、此れに由りて之を言へば蓍は神なるにあらず、龜は靈なるにあらず、蓋し其名を取りて未だ必ずしも實あらざるなり。

(卜筮篇)

乃ち王充は蓍と龜との音より推して其の老人を意味すとなす也。孤疑する時は老人に問ふて質すが如く、老人の代りに卜筮に問ふて以て之を決すべしとなすなり。

易の文章は要するに處世上、道德上の訓戒なり。之れに習熟する時は、遂には一切の事に應用して何等の礙碍をも感せざるに至るべきなり、唐の虞世南嘗て曰はく易を知ざるものは以て宰相となす可らずと易を研究することに由りて一切の人情を知了するを謂ふなり、人情に古今なし、殊に易の作者は種々なる苦心を費やし、樣々なる經驗を積むで以て成功したるものなるべきが故に其の世態人情を說く所に於ては大に傾聽の價値あり、易の經文は茲に至りて大に尊重すべしとなす。

第二節　倫理的唯心論

陸象山は心卽理を立てゝ以て根本となし、此理は卽ち易理となし易理の宇宙

に遍滿し居る所以を明かにせり、曰はく。

此理は宇宙に塞がる、誰れか能く之を逃れん、之れに順へば則ち吉、之れに逆へば則ち凶、其の象蔽せらるゝ者は則ち昏愚となり、通徹せらるゝものは則ち明智となる、昏愚なるものは其の理を見ず、故に多く逆て以て凶を致す、明智のものは其の理を見る、故に能く順にして以て吉を致す。(易說)

卽ち易理を明かにし、理に順ふて生活する時は幸福を得、逆る時は不幸に陷るとなすなり、參同契の說に似たるものあり、然れども其の絕對唯心論的に易理を解釋したる點は最も注意すべしとなす、象山又曰はく。

易を說くもの謂ふ、陽は尊くして陰は賤しく、剛は明かにして柔は暗しと、是れ固より然り、今晉の卦たる上の離の六五の一陰明の主たり、下の坤三陰を以て離明に順從す、是を以て吉を致す、二陽爻反て皆善ならず、蓋し離の明たる所以のものは是の理を明かにすればなり、坤の三陰能く其の明に順從す、宜しく其れ吉にして利ならざるなかるべし、此を以て理を明かにし、理に順つて善なれば則ち其の盡く然らざるものは亦宜しく、其れ盡く善ならざるべきなり。此理を明かにせずして、而して爻畫名言の末に泥むは豈與に易を言ふべけんや、陽貴く陰賤く、剛明かに、柔暗きの說、時あつて泥む可らざるなり。

然れども象山の所謂理なるものは宇宙一切の理を包括するなれども主として倫理を指せることは象山哲學の全系統に於て明かなり。易の理、易の道を解するもの然り、故に曰はく、

易の書たるや、遠かる可らず、其の道たるや屢々遷る。中略小心翼々、道は須臾も離る可ざるなり。五典天秩、五禮天秩、洪範九疇、帝用て禹に錫ふ。傳へて箕子に在り。

と。象山の如き倫理學者の目には殆んど人倫道德のみが映じ來り、他のものは殆んど之を忘却せんとす。然れども兎に角絕對的唯心論の立脚地より易を解釋せる者と見ざる可らざるなり。

第三節　政治思想

易を學問的に實地に應用するも亦應用の一なり。乃ち政治に付いて其一例を示めさん、其の餘、處世、交際亦推して知るべし、第一編と比較し六十四卦の分類を考ふべき也。

政治は人君の爲す所、故に易に在りては第五を以て政治の中心となす。隨て政治思想を見んとする者は須らく此の爻に於てすべし。

先づ人君に必要なる德は陽剛正か、柔順にして賢人に聽くか、又は試意を以て賢人を求むるかなり、周易に於ては之を標準として以て言を立つ。

人君は天下の萬民を親み、明かに標準を立てゝ之れが避就を示めし、來る者は之を撫し、去る者は問はず、私恩小惠を以て陰かに天下の人心を結ぶ可らず、比の九五に曰はく。

顯かに比す。王用て三驅して前禽を失ふ。邑人誡めずして吉なり。

咸の九五に云はく、

其の晦に感ず。咎なし。

又恒の六五に云はく

其の德を恒にす。貞なり。婦人は吉。夫子は凶。

其の行動皆私なきを要す、遯の九五に云はく、

嘉遯す。貞吉

人民の訴を裁判する、亦陽剛中正の君にして而して後善くすとなすべきのみ。訟の九五に云はく、

訟ふる元吉。

然れ共易に於て最も老子に似たる者は大畜の六五なり、曰はく。

豕の牙を豶す吉。

豕の牙を損して害をなさざらしむるが如く、此の爻柔に在りて要領を得て能く之を御するなり、其人を刑するや、又但だ要を得べきのみ、故に噬嗑の六五に云はく。

乾肉を噬み黃金を得、貞厲にして咎なし。

以上諸爻共に六五なり、六五は陰にして柔、卽ち柔を以て萬機の中心たるなり。

然り而して人主は萬民の中樞となり、之を養ふの中心たらずんばあらず、井の

九五に云はく。

井洌して寒泉食ふ。

井は人を養ふの具、故に以つて譬ふるなり、然りと雖も人君は日に德を研き身を修めざる可らず、大學に曰はく、新德と、而して易に於ても亦之を述べて革の九五に曰ばく

大人は虎變す、未だ占はずして孚あり。

虎は大人の象あり故に適用す、大人上に在りて其の德を新にす。人々皆之を信ずるなり、隨て人主は萬民の法とする所、自ら之を心得ざる可らず。觀の九五に云はく。

我が生を觀、君子は咎無し。

觀は陽、上にありて諸陰下にあるの象なり、故に然か云ふ。

人主賢臣を得て泰然として上にある、猶ほ鼎の動かざるに似たり、鼎の六五に云はく。

鼎黄耳金鉉。貞に利し。

此の爻柔と雖も文治の中心たり、故に人君の其の輔佐を得て其の德あるに喩ふるなり。

人主は命令を出す者、須らく公明正大を以て之を行ふべし、下或は應せざる者あるも遂に能く奉戴せられん、渙の九五に云はく。

渙のとき其大號を汗にす渙のとき王居て咎无し。

汗は出でゝ反らず、號令一たび出でゝ反らざるに喩ふるなり、而して巽の九五乃ち曰はく。

貞にして吉、悔亡ぶ、利あらざること无し、初め无くして終り有り、庚に先つこと三日、庚に後るること三日。吉なり。

人主に惡む所は其の獨斷的なるにあり、故に履の九五に曰はく。

夬て履む。貞なれども厲。

殊に幼君にありては輔佐を要す、故に蒙の六五に云はく。

童蒙吉なり。

而して師は人君の大事、故に已むを得ずして之を行ふべし、師の六五に曰はく

田に禽有り言を執るに利し、咎无し、長子は師を帥ひ弟子は尸を輿す。貞なれども凶。

一般に言へば賢臣に任ずるを以て可となす、易之を說く者甚だ多し。

隨の九五に曰く

嘉に孚あり吉。

蠱の六五に曰く

父の蠱を幹す。用て譽あるなり。

臨の六五に曰く

知臨す大君の宜き吉なり。

无妄の九五に曰く

无妄の疾藥すること勿くして喜あり。

睽の六五に曰く

悔亡ぶ厥宗噬膚を噬む往て何の咎あらん。

蹇の九五に曰く

大に蹇む朋來る。

解の六五に曰く

君子維解くことあり吉。小人に孚有り。

損の六五に曰く

或は之を益す、十朋の龜も違ふこと克はざるなり、元吉。

益の九五に曰く

孚有て惠心、問ふこと勿くして元吉、孚有て、我德を惠とす。

萃の九五に曰く

萃るに位有り咎なし。孚あるに匪ず。元永貞にして悔亡ぶ。

升の六五に曰く

貞吉階に升る。

漸の九五に曰く

鴻陵に漸む。婦三歲孕まず終に之に勝つこと莫し。吉。

豐の六五に曰く

章を來せば慶譽あつて吉。

未濟の六五に曰く

貞ければ吉にして悔なし君子の光り孚有り。吉。

大有の六五に曰く

厥の孚交如す威如す吉。

家人の九五に曰く

王家を有つに假る。恤ふこと勿くして吉。

賁の六五に曰く

丘園を賁る。束帛戔戔。吝けれども終に吉。

旅の六五に曰く

雉を射て一矢亡ふ。終に以て譽命あり。

小畜の九五に曰く

孚有り攣如す富其鄰を以てす。

賢臣の始めより來れるあり、或は中途にして阻められ、而して後來る者あり、君の剛なるあり、柔なるあり、時に塞あり、升あり、而も賢を得るは最も必要條件たるなり。縱ひ之を得ざるも中心惕々たれば則ち之を得べきなり。爻に在りて必ずしも應爻たる否とを問はざるなり、中孚は誠あるがために九五にして九二の賢を得、曰はく。

孚有り攣如す咎なし。

姤の九五に曰く

杞を以て瓜を包む。章を含めば隕ること有り、天よりす。

然りと雖も賢人を得ずと雖も時勢善なれば則ち幸にして免るゝ者あり、此れ他なし。復の六五に曰く

敦復す悔なし。

晋の六五に曰く

悔亡ぶ失得恤ふこと勿し。往は吉にして利からざるなし。

大壯の六五に曰く

羊を易に喪ふ。悔なし。

然りと雖も厄の來る測る可らず、物壯んなれば必ず衰ふ、是に於て易は乾坤二卦を以て全篇の首となし、陰陽二氣の和合によりて一切現象は起るとなし、之に擬するに六十二卦を以てす。而して兩者の調和を得たる者を水火既濟☵☲となし、既濟は其の儘にて存續する理あらずとなし、之れに次ぐに火水未濟☲☵を以てし而して既濟の九五に於て述べて曰はく。

既濟の九五に曰く

東鄰牛を殺す西鄰の禴祭して實に其の福を受くるに如かず。

是故に君主常に愼戒せざる可らず、

否の九五に曰く

否を休む、大人は吉、其れ亡びん其れ亡んとして苞桑に繫る。

離の六五に曰く

沱若す、戚嗟若す、吉。

時勢困難なるも君主剛健なれば則ち能く之を救ふべきの理あり、屯の九五に曰く

其膏を屯す、少く貞なれば吉、大に貞なれば凶。

坎の九五に曰く

坎盈たずして既に平なるに祇る、咎なし。

其の甚しきは困の九五の如き者あり、時勢の困難殆んど極に達し、而も終に能く輔佐を得て漸く之を挽回する者なり。困の九五に曰く

劓られ、刖られ、赤に困む、乃ち除にして悅びあり。用て祭祀するに利し。

時勢宜からず而して君主陰柔なる者は殆んど善くすべきの理あらざるなり。

小過の六五に曰く

密雲雨ふらず、我が西郊よりす公弋して彼の穴に在るを取る。

豫の六五に曰く

貞にして疾す、恒に死せず。

其の甚しきは則ち人主にして人に養はるゝ者あり。頤の六五に曰く

經に拂る、貞に居れば吉、大川を涉る可らず。

人主は其の一擧一動を愼まざる可らず。況んや、小人多きの時に於てをや、

艮の六五に曰く

其の輔に艮る、言に序有り、悔亡ぶ。

若し其れ時勢善にして人君亦賢なる時は必ず又樂みの道なかる可らず。易に在りて需は「まつ」の卦。節は節あるの卦なり。而して人主は共に以て和樂するを得るなり、節の六五に曰く

甘節す吉、往けば尚ぶこと有り。

需の九五に曰く

酒食に需つ貞にして吉。

然り而して人君の性を分て剛と柔との二となすときは其の理想となすべき者二あり、乾坤是れなり、乾の九五に曰はく。

飛龍天に有り大人を見るに利し。

坤の六五に云はく。

黄裳元吉。

即ち剛と柔にして剛の德の中に備なるものと是れなり。

繫辭傳に曰はく

結繩を作りて罔罟を爲し、以て佃し、以て漁す。蓋し之を離に取る。包犧氏沒して神農氏作る、木を斲て耜となし、木を揉んで耒となす。耒耨の利以て天下を敎ふ。蓋し之を益に取る。日中市をなして天下の民を致し、天下の貨を聚め、交易して退き各其所を得。蓋し之を噬嗑に取る。

第四節　易の有形的應用

乃ち易の卦象より種々なる物質的並びに精神的文明を思ひ付きしとなすなり。然れども此れ單に易の卦象に於て之を發見すといふのみにして、易より發見せしといふは事實にあらざるなり。又曰はく、

木を切て舟となし、木を刻づつて楫となし、舟楫の利、以て通せざるを濟す。遠きを致して以て天下を利す。蓋し之を渙に取る。牛に服し馬に乘じ、重きを引き遠きを致して以て天下を利す。蓋し之を隨に取る。重門擊柝、以て暴客を待つ。蓋し之を豫に取る。

此れ亦同斷なり。豫を解して悅豫の義となし。悅豫せんがために重門擊柝を置きじとなす如き何等事實に當ることなし。如何となれば重門擊柝は悅豫を得んためには相違なきも易の豫の卦より出でしにあらざればなり。殊に、

上古は結繩して而して治む。後世の聖人之れに易ふるに書契を以てす。百官以て治まり、萬民以て安す。蓋し之を夬に取る、

といへるが如き、明決の意味より文字を思ひ付きしとなすなれ共此れ亦易の卦象より文字を作りし者となす可らず。凡そ此類易の卦象より、其れ等を作りしにはあらずして、其れ等現象成立の後に於て直接に間接に易の六十四卦と關係ありといふに他ならざるなり。今後六十四卦を應用して以て新文明や新發見をなせと言はゞ易の作者と雖も恐くは以て不能事となさん。乃ち繫辭傳の如く易を物品發明に應用するは寧ろ愚なりと雖も、而も六十四卦の意味が隨所に發見せらるといふことは易の廣大無限なることを示めし、精神的活動に易を應用して興味あるものなり。

第五節　陰符經

上篇

觀天之道。執天之行盡矣。天有五賊。見之者昌。五賊在心。施行於天。宇宙在乎手。萬化生乎身。天性人也。人心機也。立天之道以定人也。天發殺機。移星易宿。地發殺機。龍蛇起陸。人發殺機。天地反覆。天人合發。萬化定基。性有巧拙。可以伏藏。九竅之邪。在乎三要。可以動靜。火生於木。禍發必剋。姦生於國。時動必潰。知之修鍊。謂之聖人

中篇

天生天殺。道之理也。天地萬物之盜。萬物人之盜。人萬物之盜。三盜既宜。三才既安。故曰食其時。百骸理。動其機。萬化安。人知其神而神。不知不神而所以神。日月有數。大小有定。聖功生焉。神明出焉。其盜機也。天下莫能見。莫能知。君子得之。固躬。小人得之。輕命。

下篇

瞽者善聽。聾者善視。絕利一源。用師十倍。三返晝夜。用師萬倍。心生於物。死於物。機在目。天之無恩。而大恩生。迅雷烈風。莫不蟄然。至樂性餘。至靜性廉。天之至私。用之至公。禽之

制在氣生者死之根。死者生之根。恩生於害。害生於恩。愚人以天地文理聖。我以時物文理哲。人以愚虞聖。我以不愚虞聖。人以奇期聖。我以不奇期聖。沉水入火。自取滅亡。自然之道靜。故天地萬物生。天地之道浸。故陰陽勝。陰陽相推。而變化順矣。聖人知自然之道不可違。因而制之。至靜之道。律曆所不能契。爰有奇器。是生萬象。八卦甲子。神機鬼藏。陰陽相勝之術。昭昭乎進於象矣。

僅か四百四十四字の簡單なる文章なれども、古來道家の金科玉條として最も有名なる者なり。今暫く其文の講義をすべし。陰符經と云ふ意味は陰は暗也默也とありて見ること能はず、又知ること能はずと云ふ意味なり。符は符號或は契合と云ふことにして、自然に天地の理に符合し居ると云ふ意味なり。他の言葉にて言へば造化の理に默契することなり。天と人とが合一になりしと云ふ意味なり。されば陰符經の四百四十四字の趣意は人間造化の理を得て其儘實行することを主としたるものなり。

〔上篇〕すべて人間の學問は天の道を觀察して、天の行の如くなりさへすればそれにて十分なり。天人合一の意味は、既に此の冒頭の二句に於て包含さる。天には水火木金土あり、是等は五行相剋の說に從ふときは、互に相殺するものなり。故に水は火を殺し火は木を殺し、金は木を殺し、木は土を殺す。されば爰に五賊と云ふ。陰符經は元來人の見逃すが如き所、或は人の見能はざる所に於て機微の眞理を發見せんとするものなれば、其詞の使ひ方も亦一種特別なり。通常ならば五賊などゝは云はず。然るを爰には特に五賊と云ふ。同じく五行は互に相賊すと云ふことを見るは、卽ち天地の理を見るなり。從て之を見しものは榮ゆとなり。人間は水火木金土の五行より成り居るが故に、五行に應じ仁義禮智信なる五箇の道德を存す。仁義て智信は心中にあり、發して人間の行爲となる。されば宇宙の眞理なる所の五行は自己の心にあり、自己の行は卽ち五行を表はすものなるを以て、宇宙の理は我手の中にあり、萬の變化は自己の身より生ずと云ふことを得。一體天の附與したる所の性質は人の人たる所以なり。人の人たる所以のものは卽ち天の道なり。然るに人の心は必ずしも天理に從ふことを得ず。言はゞ機みにして、或は善にも働き、或は惡にも働くものなり。斯の如く善惡何れとも定まらざるものなれば、之を機なりと言ふなり。其人の心を制するに天の道を標準とするなり。之に合

するやうにすることを名づけて人を定むと云ふ。蓋し天地間の現象を觀察するに陰あれば陽あり、陽あれば陰あり。陰と陽とが原因となり結果となり居るものなり。陰符經は之を面白く觀察して、不幸は幸の原因となり、殺すは生の原因となり、逆境は幸福の原因なりと云ふが如くに、人の目に見えざる所より說き起して面白く之を說明せり。天發殺機と云ひて所謂陰の氣を起して之が爲めに天の變化起る。移星易宿とは、卽ち之を形容したる詞なり。天地間の現象は陽なくしては起らずと云ひ其實陰なくしては起らざるものなれども、陰に重きを置きて之を說明したるなり。又地球上の現象にても、同じく陰に因りて起り來る故に、地發殺機、龍蛇起陸と云へり。之と同樣なる譯にて人も亦天地自然の理に從ひ、殊に陰は陽の源となることを心得、之に從ひて活動するときには、天地其儘の眞理を心中に含むが故に人發殺機、天地反覆と云へり、天も人も合發して同じく陰陽の理に從ひ活動する所より、一切宇宙間に起來する變化あり。人間の性質には巧なるもあり、拙なるもあり。人各一樣にあらざれども若し天地自然の道理に從ひ實行し努むる時は、拙劣なる性質を以て之を伏藏せしむることを得。凡て人の世の中に生活するに當りて最も心を亂すものは、九竅なり。二目、二耳、二鼻一口、大小便の各一是なり。是等の九竅ありて人心と外物と交渉あり。是等のものなかりせば人の精神は平安なるべきなり。八竅の中にても殊に深く精神上に影響し易きは、耳目口なり。耳に於て面白き聲を聞くが爲に心はそれに傾く、目に於て能く美麗なる色を見るが爲に心は之に傾く、口に於て能く味を知るが爲に心は之に傾く。斯の如く耳目口の三者は最も人の心を傾かしめ易し。從ふて是等の竅を塞ぎ人心を定むるが如きは精神修養の第一義なり。而も絶對的に之を塞ぐ譯には行かず。耳目口の三者をして、之を動かさんとするときは動かし、靜かならしめんとするときは靜かならしむる如く物の爲に動かされず、我心に從ひて動くやう爲すこと肝要なりとて、卽ち可以動靜と云へり。陰符經を始め道家の理想は內視反聽と云ふ。言は卜心身の平安は如何にしても自己の眼中を視る如くにし、又耳中にて聽く如くにて居らば精神は靜まり來る。斯の如く內視反聽の四字は道家修養の一工夫なり。

之を摘言すれば、陰陽の理に於て、陰に陽の源となり、陽は陰の源となる、禍は幸

の源となり、幸は禍の源となれども、幸必ずしも永續せず、禍必ずしも永續せず、互に相原因となると同時に相滅せんとする所のものなり。實に陰陽の理は奇なるものと謂ふべし。火は木より生ずれ共、火激しくなる時は木を消滅するものなり。惡人國内より生ずるものなれ共、時節來れば國家を破壞するに至る。斯の如き理を知りて能く精神を修むる者は聖人なり。卽ち陰陽消長の理を靜觀するが陰符經の趣意なり。

〔中篇〕凡そ天道は陰と陽とにて陽は生ずることを掌り陰は殺すことを掌る、天の中には生ずる道と殺す道とありて一は生じ、一は殺し行くものなるが、自然の道理にして天地萬物、人と三者に就き之を考へ見るに、天地は萬物を生ずるものなれ共、亦萬物を殺すものなり。是天地は萬物に取りて盜賊たる所以にして又萬物は人の耳目を動かして其心を失はしむるものなれば萬物は人に取りて盜賊と云ふ可し。然るに人も亦萬物を食して始めて成長するものなるが故に、人も萬物に取りては盜賊なり。斯の如く天地、萬物、人は互に盜賊となり合ひ居るも、此三盜は各活動し、天地人三者は是に依りて成立するなり。盜賊なる詞は惡しけれ共、意味には差支ひなきものなり。此故に其時を失はず、食物を得る時は身體皆理む可し。又其機を見て能く働く時は、一切の變化は安く行はる。是れ實に宇宙の機微なる所なるが、一切の人は唯其不可思議の表に見ゆる所を知り、表に見えざる所に不可思議のあるを知らず、太陽或は月の運轉するに一定の法則あり。又大なるもの、小なるもの各一定の分量あり。而して天地萬物の結果現はれ來り、神變不可思議なる作用現れ來る。然るに其萬物の相互に影響し合ふ所の機微なる所卽ち機む所は天下の人能く見知ることを得ず。君子は斯の如き機微なる所の道理を得て、自己の身體を固む。小人は斯の如き道理を知れば却つて自己の一命を輕んずるに至るなり。

〔下篇〕盲目なる者は耳聰明にして、聾者は目聰明なり、自己の精神の一方を塞ぐ時は、必ず他方面に於て其の勢力を發揮することを得る故に人は精神を外に向はしめて以て之を消耗するが如きことなきが肝要なり。導引の術卽ち道家の術を行ふよりも十倍の効力あり、若し其術に從ひて實行し三晝夜間も繼續する時は終に導引の術を實行するより萬倍の効力あるべし。凡そ人心は外物を見る所

より生じ來りて、外物消滅するとともに消滅するものなり。心と外物とは相對し居るものなるが、そは何れの所より來るかと云へば目より來るなり。目は前述したる三要の一にして、殊に重要なるものなり人は目を塞ぎて見えざる如くする時は自ら精神の紊亂せらるゝとなし。天は恩なきが如くなれども、其實一切の萬物はそれに依りて生ずる故に、大恩ある理なり。迅雷烈風も天の爲に起る。此點より考ふるに、人の至つて樂しき性は綽々として餘裕あるものにて又至つて靜かなる性質は自ら廉なるものなり。卽ち心を用ひずして自ら神妙不可思議なることを得て、通常の人よりも一段深く執心する時に於て起り來る。天は至つて私なるものなれ共、又一面より見れば至つて公平なるものなり。其然る所以のものは何ぞや、卽ち禽之制とて、天が一切萬物を作り、或は之を用ふる所の要點は一氣にあり。一氣は卽ち陰陽のある處なり。陰陽は反對の性質にて互に原因となり結果となる。生ずるとは死の原因死とは生ずるの原因なり。同樣に恩は人を害ふ所より生ず草木は冬に至りて害される故、來年又生ずることを得、害は恩より生ず。卽ち草木の殺さるゝは生せらるゝがために起り來る、斯の如き不可思議の道理は之れを想像することすら困難なるが故に、愚なる人は其表面に表はれたる天地の文理を以て不可思議となす、卽ち聖となす。然れども我は時物の文理を以て哲となす、人以愚爲聖とて、聖人は愚なる者と云へるは相當の理ある說の如くなれども、自己の見る所にては聖人は愚ならぬ者也。又人々は聖人は奇なることをなすものと思へども、自己は聖人は奇ならざることをなすものと思ふ。水に沈み火に入りて自ら滅亡を取るが如く、人は天地造化の道を究めざるが故に終には自己より禍を招くが如きことあるなり。

一體陰符經の趣意とする所は道なるが故に靜かに觀察する方に重きを置く。宋の周茂叔の說にも靜を主とせるが、道家は凡て其の如くにて動と靜とあれば靜を中心として之れより動を見るなり。去れば自然の道は靜かなり故に、天地萬物生ずと述べたり天地の道は自然に水の浸入するが如く行はるゝ故に陰と陽とが互に相待ち居るものなり。陰と陽とは互に相推して而して變化行はる。聖人知自然之道不可違。自然の道其儘に因りて之を制御す。但靜なる所の道は律曆も契し能はざる所なり、言はゞ奇器なり。其道より一切萬象の生じ來るあり。易の八

卦、十干、又神機鬼藏、陰陽相勝の技術に至りても、皆此理を基礎として行はるゝものなるが、其等は目に見ゆる所のもの以上にして、目に見ゆる所を以て之を觀察せんとするも到底出來得ざることなり。

【總評】以上は陰符經全體の意味なり、本文は極めて簡單にして、適當に其意味の如何なるものなるやは知り難き所あれども、先づ大體は斯の如きものなるべし。今其二三の要點を擧んに、凡て世の中に處するに當りては、何ごとに依らず心を靜かにするを肝要とす。心を靜かにして以て物の道理を觀察するなり。此心得は周易需の卦の六四、上六に於ても見ることを得。又九二に於ても見ることを得。根本に於て周易と一致する所あり。又莊子の養生主の中に示しあることにても之を見るを得べし、次に凡ての物事は形の上に於て之を見ず、其裏面より之を見るを要するなり。凡て物事を深く觀察する時は、幸を見ても必ずしも喜ぶことをせず、禍を見ても必ずしも悲むことをせざるなり、其等の點は非常に興味ある所なりとす。されば陰符經一篇を讀む時は如何なる困難に逢ふも靜かに捲土重來の勢を挽回し得べきなり。

第六節　萬物數の說

數は易に於ては屢々言ふ所なり。之を中心として處世する時は宇宙を見ること恰も階段の如くなるべく、規則正しく行はれ、宇宙は恰も階段の復雜せるが如く觀察せらるべし。此點に於て易の哲學とピュタゴラス派の哲學も能く相似たる所あり。易哲學の講究者は恰も宇宙を掌中に收めたるが如き感あるべし。故に暫く易の此點に就いて考察し、其ピュタゴラスと異なる所を擧げんとす。尙前章易とピュタゴラス哲學とを參照すべし。只だ彼れに在りては兩派を精密に比較せんことを期し、此れに在りては數として宇宙を見る上に付いての差を述べんとす。要はピュタゴラスは本體學的に數的に觀察し、易は但だ數を標準として見たりといふに他ならざるなり。

易を說くものは多く一切萬物は皆數に由りて司配せらるとなすを以て普通とす。若し果して然りとすれば易はピュタゴラスの哲學と大に似たる所あり。今一應易の數を述べざる可らず。凡そ一面を執へて以て其の全般を蔽はんとする

は如何なる方面に於ても大なる過失を醸成する者なり。易は數なりといふも亦此くの如し。易に六十四卦あり。數に由りて生ずるにあらず。五十策に由りて六爻卦を得る所を見れば數より六十四卦を生ずる如くなれども六十四卦本來の意義に溯りて考ふれば則ち陰陽兩者を積聚せる結果に外ならず。決して數より生せるものと見る可らざるなり。且つ彖辭象辭の如き何れも處世上道德上の方針を敎へたるものにして、數にはあらず。然らば則ち易を以て數なりといふは何れに本づくかといふに五十策を中心として、九六七八等の數が卦爻と關係する所大なるが爲めのみ。殊に繫辭傳に云はく

天數五、地數五。五位相得、而各有合。「天數二十有五、地數三十。凡天地之數五十有五。此所以成變化而行鬼神也。乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四、凡三百有六十、當期之日。二篇之策萬有一千五百二十、當萬物之數也。

此の一一五二〇なる數は六十四卦に付いて、陽爻二百十六、各爻は九なりとし、陰爻一百四十四、各爻六なりとす。合して一一五二〇なりとするなり。

$$216 \times 9 + 144 \times 6 = 11520$$

然れども此數を萬物の數に當るとなすの根據は何處にありや。今日の思想にては到底理解すること能はざる所に屬す。易に在りては乃ち六十四卦を以て一切萬有を總括せんとし、而かも六十四卦三百八十四爻に於て九六、合して一一五二〇なる數を發見し得るが故に此くはいふなるべし。

萬物の數が一萬一千五百二十といふは甚だ疑はしき見解なりと謂ふべし。今假りに萬物の數を以て然りとなすといふも、數の間に何等か或る關係を發見したるにもあらず。但だ萬物の總數然りといふに外ならざるなり。又卦變の法により、一卦變じて六十四卦となるべし。而して各六十四卦各萬有一千五百二十の數を具へ、上下經六十四を乘ずれば則ち七十三萬七千二百八十となる。之を以て萬物委曲の數なりとも見られざるにあらず。此種の數的思想を取りて之をピュタゴラスに比すれば則ち實に大に異なるものあり。ピュタゴラス派は數を以て萬物の本性となし又模範となすアリストテレース氏の書に據ればピュタゴラス派に關する二個の句あり。一を

萬物の原因は數なり。

となす。此れ本性の意なり。他を

萬物は數のミムネーシンなり。

となへ。卽ち寫眞の意なり。アリストテレース氏は之を以て矛盾する者にあらずとなす。然れども細かに之を味ふときは *αιτια* 原因と *μιμησις* 寫眞と自ら其の意味を異にせざるを得ず。少くともツェラー氏の言へる如くピュタゴラス派に於ては形式と實質との區別を發見する能はず (Die Philosophie der Griechen) 數其者は抽象的の概念にして實在せる者にあらず。然るに若し「一」なる數を沈思熟考すれば遂に思想の麻痺を來たし「一」其者が實在するが如くに思ふなり。是れを以て數を指して本性となし實質となす。數は物體其者と異なるがために物體を以て數の寫眞となす。乃ち數と物體とを結合せしめ又離別せしむる間に於て彷徨しつゝありしなり。由是觀之。數の觀念は思想麻痺の結果に外ならず。其の何れなりやは今强ひて之を論ずるの要なけれども兎に角ピュタゴラス派は數を以て萬物の本躰となし萬物の關係を以て數的なりとなせるは明かなりとす。卽ち、ピュタゴラス派は少くとも哲學的數的に宇宙を觀念したるもの、殊に其の一切萬物を以て數の寫眞となせる所は最も注意すべし。之を數の哲學といふも決して差支なきなり。易も同じく「萬物の數に當る」なりといひ「易は逆數なり」といひて、數を主とする如くなれども、單に蓍を數ふることのみを指せるに外ならず。哲學的に一種の意味を發見せるにもあらず。又數を以て萬物の本躰となすにもあらざれば、數の數儀のピュタゴラスと大に異なるものあるは最も明白なりとす。

第五章　易と他の哲學系統

第一節　易と各種の思想

易なる思想系統は上下經と十翼とを通じて窺ふべきのみ。卽ち吾人は上下經と十翼とを通じて見たる易の思想系統を知り得るのみ。此の思想系統は必ずしも易の原始的なる者にあらざるべし。然れども吾人の知り得る最古なるものは單に此れに外ならず。十翼は孔子の作にあらずとするも上下經の思想と矛盾せざるのみならず。之を發揮して以て餘蘊なきものなること、及び上下經以外の思

想的要素を包含せざることとは之を許さゞるを得ず。故に易の思想系統を述べんとするものは上下經と十翼とに據らざるを得ず。後世諸種の思想ありて何れも易の思想なりと稱すれども、其の果して然るや否やを批判するも亦上下經十翼に合するや否やを以てせざる可らず。若し之に合せざる者ならば縱ひ全然易の思想にあらずといふ可らずとするも、少くとも古易にあらずと謂ふべきなり。況んや後世附會の說多きに於てをや。

吾人は上下經十翼の思想を發揮するに勉むる者。後世易の範圍と見做さるゝ者にして其實然らざる者甚だ多し。或は易を弄ぶに過ぎたる者あり。吾人は此種の思想の或る者に就て其の如何に易と直接又は間接の關係あるやを述べんと欲するなり。

第二節　易と五行說

五行と易とは相關するが如くなれども其實は全ゝ無關係なり。何故かと云ふに、上下經十翼に於て未だ嘗て五行と言ふ事なければなり。然れども五行は何れも自然界の現象なれば易の陰陽に由りて包括せられずと謂ふことなし。故に此方面に於て五行も易の思想に關係ありと謂ふべし。然れども此れ五行なるが故に易に關係あるにあらず。又方位に就て考ふるに五行は東西南北と中とに配當せらる。八卦は四方四維に配當せられ、中といふことなし。八卦の方位と五行の方位とは一部契合する所ありと謂ふべきのみ。五行の意味は五行として始めて明かなり。之を析いて八卦に配當するは出來き得べきにせよ、單に然かなし得べしと云ふに止まり、他に何等の意味もなし。去れば五行少くとも五行哲學は八卦と關係なき者と謂ふべし。五行哲學は五行の方面より自然界を觀察し、八卦は其方面より觀察せるものなり。兩者共に觀察の方面を別にす。强て其一致する所を求むれば

一、五行に相生相剋の性あり。相生は木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は更に木を生ずるものにして循環端なし。相剋は水は火を、火は金を、金は木を、木は土を、土は又更に水を剋するものにして是れ亦循環端なし。相生と相克とは自然に行はれ居る者にして卽ち陰陽二性の流行に外ならざる

なり。

二、五行哲學に據れば自然界の現象は皆五行の和合ならざるなし、易の哲學に據れば自然界の現象は何れも八卦の性質を有せざるはなきなり。卽ち約を以て自然界を觀察せんとするは相似たりと謂ふべし。

若し全體より言へば五行も亦自然界の現象として陰陽の範圍內なるものなり。然れども易は其の水たり、火たり、將た又他の各三者たるを知り、五行たるを知らざるなり。換言すれば五行哲學は易の範圍にあらざるなり。

然れども易を以て人事を占せんとするものは五行の如き人生と深き關係あるものを捨て置くこと能はず。之を易の中に援用し來らんと勉めたり。五行は直接に十干に關係し、間接に十二支に關係あるがために五行、干支は合して一圍をなし、以て易の哲學を助けたり。五行易といふもの是れなり。漢の京房に始まる。此れ又一種の易にして特別なる研究を要する者なり。今其圖一二を示めさん。

八卦ヲ五行ニ分屬ス

乾　兌（金）　離（火）　震　巽（木）　坎（水）　艮　坤（土）

六十四卦ヲ五行ニ分屬ス

乾、姤、遯、否、
觀、剝、晉、大有。

コレヲ乾宮ノ八卦ト云皆金ニ屬ス

兌、困、萃、咸、
蹇、謙、小過。歸妹。

コレヲ兌宮ノ八卦ト云皆金ニ屬ス

離、旅、鼎、未濟、
豪、渙、訟、同人。

コレヲ離宮ノ八卦ト云皆火ニ屬ス

震、豫、解、恒、
升、井、大過。隨。

コレヲ震宮ノ八卦ト云皆木ニ屬ス

巽、小畜。家人。益。

无妄。噬嗑。頤、蠱、

コレヲ巽宮ノ八卦ト云皆木ニ屬ス

艮。賁。大畜。損。

睽。履。中孚。漸。

コレヲ艮宮ノ八卦ト云皆土ニ屬ス

坤、復、臨、泰、

大壯。夬、需、比。

コレヲ坤宮ノ八卦ト云皆土ニ屬ス

五行生克

木生火　火生土　土生金　金生水　水生木

水克火　木克土　火克金　土克水　金克木

幹合

甲ト己ト合　乙ト庚ト合　丙ト辛ト合　丁ト壬ト合　戊ト癸ト合

スベテ合トハ合ヒ聚リテ親シキ意ナリ

支合　亦六合トモ云

子ト丑ト合　寅ト亥ト合　卯ト戌ト合　辰ト酉ト合　己ト申ト合

午ト未ト合

六冲　亦六衝トモ云

子ト午ト冲　丑ト未ト冲　寅ト申ト冲　卯ト酉ト冲　辰ト戌ト冲

己ト亥ト冲

然れども此種の配列は易本來の意味にあらず。五行說の流行と共に之を易に附會したるものなることは何人も直ちに想到する所なるべし。

第三節　易と干支及び人相

蠱䷑の卦彖辭に先甲三日後甲三日の語あり。卽ち周易の彖辭が作成せられし當時に於て甲子を以て日を數ふるの習慣ありしを知るに足る。甲子は草木陰陽消長自然の狀態を分段して說明せるものに外ならず。易は固より陰陽消長の理を說明したるものなる故、兩者一致する所あるは固よりなり。然れども易

は八卦六十四卦を通じて宇宙を見たるもの、干支は單に一年の陰陽消長を示めせるのみ。故に五行よりも一層親密なる關係あるは固よりなり。干支を月日に應用し、今日は何の日なりやといふて干支の性が時日に附着し居るが如く思ふは迷信なるべし。從て此迷信の上に易の六十四卦を應用し來るが如きは一種の說には相違なきも易を解する所以にあらず。易は干支が陰陽消長の理を說明する範圍に於て其の己れに一致するものあるを許せども其以上は之を許さざるなり。六十四卦を一年に配當する如きは全く干支の思想に由りて影響せられたるものにして易の思想にあらざるなり。

賣卜者は手相人相などを見るが故に易と人相と何か關係でもある樣に思はるれども其實兩者は何の關係もなく、更めて此に辨ずる必要もなき程なり。只だ一言簡單に之を述べんか、人相は各個人の容貌論なり。易は陰陽論なり。易は容貌を見ても陰陽の方面よりするのみ。立身するとか出精するとか、又は金儲があるなどといふ方面より見るにはあらず。兩者全く別の者なり。

第四節　十干十二支の說明

邵康節は易を論ずること最も詳密にして六十四卦を氣節に配當せり。參同契の意も亦此に在り。

十干十二支の信仰は殆ど社會的普遍的にして之を知らざる者なし。殊に十二支の如きは漢音にてシ(子)チウ(丑)イン(寅)ボウ(卯)など讀む者は殆んどなく鼠牛虎兎と讀むを以て通例とす。而して人性にしても寅生は强く子生は些事に拘泥するなどと信ぜらる。此十二支を動物に配當するは支那の古代にありしことにて日本に輸入せられたる者なり。そは文政年間に上梓せられたる石井光致の和漢曆原考と名づくる一小冊子に纒めあれば之を紹介すべし。

元來干支は黃帝に始まりし者なりとは支那の傳說なれども固より確實ならず。「大撓造甲子」は極めて疑はしきことなり。十干を「エト」と云へるは「兄弟」にて木の兄木の弟、火の兄、火の弟と云へることなり。餘は木火土金水の順序に合して知るべし。

甲　(史記律書)甲者、言萬物剖符甲而出也。草木の未だ生出せず甲を被むり居るもの將に出でんとするの象。

乙　(律書)言萬物生軋々也。草木土を軋り出るなり。

丙　(律書)言陽明著明、故曰丙。陽氣次第にあらわれ、明かになるの義。

丁　(律書)丁者言萬物之丁壯也、故曰丁。枝葉の盛んなる義。

戊　「月令註」戊之言、茂也、萬物枝葉皆盛茂。草木の茂る義。

己　(釋名)己紀也、皆有定形可記識也。萬物土より出でゝ形をなすの義。

庚　(律書)庚者言陰氣庚萬物、故曰庚。冷氣加はり萬物かはり行く義。

辛　(律書)辛者言萬物之辛生、故曰辛。(釋名)辛新也、初新者、皆收成也。八月に至り物悉く新になる義。

壬　(律書)壬之爲言任也。言陽氣任養萬物於下也。明年生出すべき草木を土中に養ふ義。

癸　(律書)癸之爲言揆也。言萬物可揆度也。故曰癸。土中に在る草木の陽氣を待ちて推し量り生出せんと催すを揆と云ふ。

次ぎに十二支に動物を配當せる起原は未だ明かならざるものあれども其古代に存在せしことのみは之を知ることを得。此れにて略ぼ十二支の日本に輸入せられたるものなることを知るべし。

子　(律書)子者滋也。萬物滋於下也。䷗復ノ卦。十一月に當る。易說卦に艮爲鼠。艮東北之卦也。萬物之所成終而所成始也。故曰成言乎艮と。亥の月に終を成して子の月に始を成すなり。是子を鼠と云の證なり。

丑　(律書)丑紐也。言陽氣在上未降。萬物厄紐未敢出、䷒臨の卦、十二月に當る。丑を牛と云ふは禮の月令に季冬月。出土中、送空氣と。其證を見るべし。

寅　(律書)萬物始生。螾然也。故曰寅。䷊泰ノ卦。一月に當る。左傳襄公七年に度寅慶虎の名あり。以て寅を虎となすの古きを證すべし。

卯　(律書)卯之爲言茂也。言萬物茂也。䷡大壯ノ卦。二月に當る。酉陽雜俎に月中有兎。乃卯之屬也と藝林伐山に日中有金雞乃酉屬也。月中有玉兎乃卯之屬也。と

辰　(律書)辰者言萬物之蜃也。䷪夬ノ卦。陽氣盛にして萬物茂生したる上

に辰の時に至て萬物益伸て餘あるなり。辰を龍と云ふは易說卦に震爲龍と是なり。

巳（シ）　（律書）巳者言陽氣之已盡也。䷀乾ノ卦四月に當る。說文に四月陽氣已出。陰氣已藏。萬物見成文章。故巳爲蛇象形。徐曰。巳主蛇象。蛇之變化有文章也と。言は蛇の文章みごとに見るゝに因りて四月萬物見に文章を成すにあてゝ蛇の象を寫て巳の字をなすなり。巳を蛇と讀は是なり。

午（ゴ）　（律書）午者陰陽交。故曰午。（釋名）午忤也。陰氣從下上。與陽相忤逆也。䷫姤ノ卦。五月に當る。韻會に馬屬午。晉姓司馬。因改司馬官爲典午と云。字彙に馬生於午。稟火氣而生と云。（王氏困學紀聞）吉日庚午既差我馬（詩小雅吉日之章）午を馬とするの徵なるべし。

未（ビ）　（律書）未者言萬物皆成有滋味也。䷭遯ノ卦。六月に當る。陰氣六月に至て長。陽氣を助て萬物の熟するの時にて陰陽よく相群居するの意なり。故に未を羊となす。陸佃曰。羊性善群と。

申（シン）　（律書）申者言陰用事。申賊萬物。（釋名）申身也。物皆成其體。各申束之。使備成也と

䷋否ノ卦。七月に當る。七月の時陰氣體を成を用て。萬物のまさに賊べきものはなほも嚴傷賊なり。陸佃曰。猿之德。靜以緩。猴之德。躁以囂とこれ猿を陽となし。猴を陰となし。陰を用て嚴賊の意。躁して囂をもつて申を猴と云にや。

酉（ユウ）　（律書）酉者萬物之老也。（淮南子）酉者飽也。䷓觀ノ卦。八月に當る。八月陰氣長して上の申を助る故に。陽衰萬物老て死に觸んとするなり。老て死するは物よく齊の理なり。易の說卦に齊乎巽。東南也。また巽爲雞と。酉を雞と云の徵なり。

戌（ジユツ）　（律書）戌者言萬物盡滅。故曰滅。䷖剝ノ卦。九月に當る。月令に九月之時。豺祭獸。因候配之。狼形相似。說文云豺狼屬也云々。豺和訓ヤマイヌと訓す。戌を狗と云の證なり。

亥（ガイ）　（律書）亥者閡也。言陽氣藏於下。故該也。孟康曰。閡藏塞也。陰雜陽氣。藏塞爲萬物作種也。䷁坤卦十月に當る。易の說卦坎は陷也。坎爲豕と。純陰にして地上に陽なくして地下に陽陷ゆる。坎を豕となすとまた呂氏春秋孟冬紀

食黍與毳と。

以上の解は明了ならざる所もあれ共支那古代に於て十二支と動物とを關係せしめしこと明かなり。私かに思ふに、十干十二支は本來陰陽消長の理を述べたる者なるが一般人民に其名を覺えしめんが爲め動物にあてはめ、之を記憶せしめしならむ。恰も盛岡市にて發行する繪ごよみの如く文字を知らざるものに分らしめんためなるべし。動物に當つるに付いては陰陽消長の狀態に直接間接因緣あるものを撰らみしならむ。其は兎も角、易は六十四卦なり。干支は十又は十二なり。數に於ても能く調和し得ざる所あり。但だ、

先庚三日後庚三日

とある。此れ易に干支をいふなれども畢に時日に就いていへる耳。干支其者に哲學的意味を附加せるにはあらず。卽ち單に何日より何日迄といへる丈のことにして其れ以外に何等意味あるにはあらざるなり。

第四節　易と老莊哲學

老子の書中陰陽に就いて言ふものあり曰はく。

道生一。一生二。二生三。三生萬物。萬物負陰而抱陽。冲氣以爲和。人所惡。唯孤寡不穀。而王公以爲稱。故物或損之而益。或益之而損。人之所教。我亦教之。（下略「第四十二章」）

と。而して老子は矛盾相對の概念を用ふるが故に全體として陰陽の思想に關係ありと謂ふべし。試みに其一二句を引用せん。

枉則直。窪則盈。敝則新。少則得。多則惑。是以聖人抱一。爲天下式。不自見故明。不自是故彰。不自伐故有功。不自矜故長。夫唯不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸之。（第二十二章）柔勝剛。弱勝强。魚不可脫於淵。國之利器。不可以示人。（第三十六章）

天之道。其猶張弓乎。高者抑之。下者擧之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道則不然。（第七十七章）

是れ易の謙卦の主旨乃至一般に易意と合致す。謙卦彖傳に曰はく。

天道下濟而光明。地道卑而上行。天道虧盈而益謙。地道變盈而流謙。

と。又豐卦彖傳に曰はく。

豐大也。明以動故豐。王假之。尚大也。勿憂宜日中。宜照天下也。日中則昃。月盈則食。天地盈虛。與時消息。而況於人乎。況於鬼神乎。

と。更に損卦彖傳に曰はく。

損。損下益上。其道上行。

此れ等の主意は正さに老子の謙虛に合する者なり。去れば古來、易老一致の說をなし、又は老子は易に出づとなすもの學者其人に乏からず。漢の嚴遵（道德指歸論）太田晴軒（老子全解）宇佐美惠（老子註）等是れなり。漢書藝文志に曰はく。

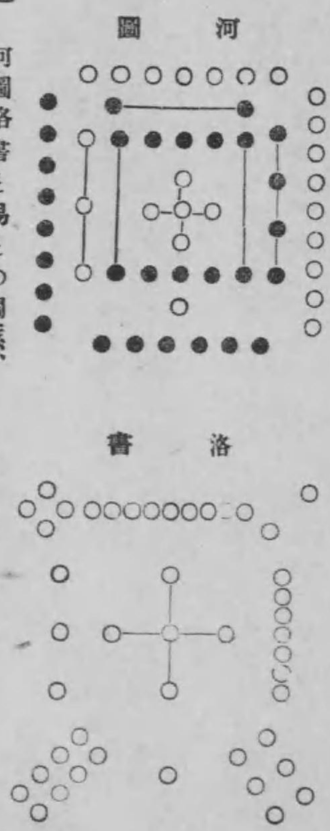
道家者流蓋出於史官、歷記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本。清虛以自守。卑弱以自持。此君人南面之術也。合於堯之克讓、易之嗛嗛。一謙而四益。此其所長也。及放者爲之。則欲絕去禮樂、棄仁義。曰。獨任清虛可以爲治。

此れ道家を以て古今の成敗存亡の跡を觀察し、清虛謙讓の能く身を保つに足るを以て、之を以て其の主義綱領となせるものとなすなり。猶陰符經の部參考すべし。

第五節　易と河圖洛書

一　形狀

今日河圖洛書として傳へられたるものを云さんに左の如し。



二　河圖洛書と易との關係

繫辭に曰はく河圖を出し、洛書を出し、聖人之れに則る。と、此の一句あるが爲めに後世の儒者多くは、易は河圖に則りて以て作られたりとなす。孔安國曰はく、河圖は、伏羲氏天下に王たるの時、龍馬河に出づ、故に其文に則りて以て八卦を畫す

と。洛書は禹、水を治むるの時、神龜文を負て背に列す、數あり九に至る。禹、遂に因りて之を次で以て九類をなす云云と。漢の劉歆曰はく、伏羲氏天に繼で王たり。河圖を受けて而して之を畫す。八卦是れなり。禹、洪水を治めて洛書を錫ふ、則りて而して之を陳ぶ。九疇是れなり。河圖洛書は經緯を相なし。八卦九章は表裏を相なすと。

此等の學者は何れも河圖に則りて以て八卦を作れりとなす。此れ實に易の十翼の作られし頃より漢を通じ、宋に至り傳はり來れる所の傳說なり。されば馬融、王肅、姚信の如き有名なる學者も皆此の說に贊し、伏羲氏河圖を得て而して後易を作れりとなす。

然るに河圖の何たるやは後世之を詳にする能はず。案ずるに、周の成王の顧命に河圖と天球とは列して東序に在りとある以上は其者現に存在して、周の時に傳はりしこと疑ふべからず。孔子も亦鳳鳥至らず、河圖を出さずと言ひしが故に、河圖なる傳說の當時に存在せしこと疑ふべからず。然れども孔子の時、果して河圖なるものありしや、否や、又孔子自身に之を見しや否や、明かならず。孔子の時には河圖、鳳鳥、麒麟等は聖王の瑞相なりとして信ぜられし者の如し。孔子は嘗て麒麟を見たることなく又鳳鳥を見たることなかるべし。唯だその聖王の瑞として言ひ傳へられしが爲めに鳳鳥至らずと說きしのみ。又河圖を見しことなきも亦同じく言ひ傳へられしが爲め河圖を出さずと說かれしなるべし。

然り而して今日傳はる所の河圖洛書は、宋の初め河南の道士、陳摶に出づ。陳摶は卽ち陳希夷、陳圖南、麻衣道者等の別名を有する者。陳摶之を周子（周茂叔）に傳へ（太極圖參考）遂に朱子に至り盛に發揮せられたり。漢の頃學者河圖の何者たるを云ふことなく而して遙か下りて唐宋の間に至り、俄かに其者ありといふは、吾人の信じ得べからざる所に屬す。唯六朝の頃、北魏の關朗の言として朱子の引用せる所のものに曰はく、河圖の文七は前、六は後、八は左、九は右、洛書の文、九は前、一は後、二は左、七は右、四は前の左、二は前の右、八は後の左、六は後の右なりと。

若し果して然りとせば關朗の時已に今の河圖洛書なるものありしが如し。此れ未だ考ふべからざる所に屬す。兎に角漢代の學者一人も河圖の何たるを知らざる以上は、關朗の徒之を知れりとするも、此れ單に道士等の傳ふる所に屬し、儒者の研究するが如き公正の者にあらざしりなるべし。

易は河圖にのみ則りて作られしにあらず。河圖に則りて以て易を作るといへるは繫辭を以て初めとなす。繫辭に曰はく、

此故に天神一物を生じ聖人之に則る。天地變化聖人之に效ふ。天象を垂れて吉凶を見す、聖人之に象る。河圖を出し洛書を出し、聖人之に則る。

故に河圖にのみ則りて以て易を作りしにあらず。卽ち神物、變化吉凶、洛書等何れも皆則る所ありしなり。而して河圖は其中の一のみ。而かも其の文勢に據れば必ずしも有力なるものにあらず。且つ繫辭傳の他の部分に由れば明に天地間の現象に則りて作られしものなり。其文に曰はく、

古伏犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、伏しては則ち法を地に覽、鳥獸の文と地の宜しきとを見、近くは之を身に取り、遠くは之を物に取る。茲に於て始めて八卦を作り以て神明の德に通じ以て萬物の情を類す（繫辭下傳第二章）

されば易は、一面には天地自然の現象に則ると云ひ、一面には河圖洛書に則ると云ふ。宗の歐陽修の言へるが如く誠に矛盾するが如し。然るに尙進で之を考ふるに前文河圖を出し洛書を出し聖人之に則ると言へるは、聖人の則りし者は種々ある中に於て僅かに一部の事なる故に必ずしも之を以て矛盾すとなすべからず。論じて茲に至れば吾人は易は天地自然の現象に則りて作られたるものにして河圖洛書に則りて作られしものにあらざることを斷せざるべからず。河圖洛書は單に一部のことにして易を作るための一參考たりしに外ならず。之を以て唯一の根據となし、深き廣き關係あるものゝ如く思ふは全く後世のことに屬す。然らば圖書と易と如何なる關係かある。圖書より易が思ひ付かれしとすれば如何なる點が動機となりしか。吾人の今日の智識にては此の如き圖書より易を思ひ付くこと能はざると同時に、古人が如何にして思ひ付きしかを想像することは能はざるなり。强ひて之を求むれば數に奇偶の別あることを注意せしめ、陰陽觀念を起さしめしといふべきなれども此れよりかも自然の現象の方が遙かに好都合なるべし。江永の河洛精蘊の如きは先づ河圖洛書ある者と見做し、易學の思想を以て易に關係ある樣解せしに外ならず。吾人は今日の圖書を以て深き意味あるものにあらずとなす。

第六節　易とピュタゴラス哲學との異同

一　比較の方法

凡二物を比較するには共通の基礎なかるべからず。而かも其れは確實にして明白ならざるべからず。然らざれば比較の目的を達する能はざるのみならず、其結果は甚だ不正確の者たるを免れず。世のピュタゴラス哲學を説く者或は曰はく易に似たりと。而して易を説く者も亦曰はく。ピュタゴラス哲學に酷似せりと。蓋しピュタゴラス哲學の主とする所は數の教義に在り。而して易の十翼亦多く「一二三」等の數を列擧するを以てなり。是に於て余は此異同を研究せんとするの動機を與し。着手するに及び、疑問は愈々繼起し研究の範圍は益々濶く、殆と皇洋の嘆を發せり。然れども畧々其の要綱を把捉するを得たり。

兩種の哲學を比較するに當り大困難の途に當るは兩種の哲學の範圍の不明瞭なると是なり。ピュタゴラス著はす所なし。其思想を見るは實に後人の書に據る。後人の稱してピュタゴラスの説と爲す者にして而して其實は門下の説なる者あり。或はピュタゴラス派の學者の著作として傳はる者にして實は後人の假託に出づる者あり。ピュタゴラス其人の説とピュタゴラス派の説とは異なる所あるが如し。今比較せんとするに當り。ピュタゴラス其人の説を取るべきか或はピュタゴラス派の説を取るべきか。若し兩者が判然區別せられ居る者ならんには孰れを撰むも可なりと雖も然らざる以上は此岐疑を與さゞるを得ざるなり。殊に易の哲學との權衡に於て然りとす。易の哲學を見るには二經と十翼とに據るか十翼は同一人の手に出でたる者にあらず。隨て相互の間に解釋を異にせる者あり。殊に宋儒の十翼を解するに至りては一種特別なりと謂はざるべからず。然かも世稱して易の思想然りと爲す。然らば易の思想を看るべき者は果して何なるか。

若しピュタゴラス派全体を取る時は易全体を取らざるべからず。然るに若しピュタゴラス其人のみを取らんとする時は易に於ては何を取るべきか。何人と雖ども精密に答ふること能はざるなり。論じて茲に至れば兩者の範圍は各其全体ならざるべからず。而して先づ根本的なる者を比較し、次に枝葉的なる者に移るべきなり。

ロ　兩種哲學の著作

ピュタゴラス派の書籍はムラキウス氏の希臘哲學輯逸書中に收められる。其の大略左の如し。

一、フィロラオス
二、ヒッポダモス、トゥーリヨス幸福論　Ἱπποδάμου Θουρίου ἐκ τοῦ περὶ εὐδαιμονίας.
三、フィルュファモス　生活論　περὶ Βίου.
五、ヒッパルヒョス　安心論
四、テアゲース　道德論
六、メトーポス　道德論
七、クライニヲス　信心論
八、クリトーン　謹愼幸福論
九、ポーロスロイカイノス　正義論
一〇、ディヲス　美論
一一、ブリュメーン　經濟論
一二、カリクラティグ、ラコーン　家族幸福論
一三、ペムペロス　兩親論
一四、ペリクティヲネーヌ　智識論
一五、同婦德論
一六、フィンチアス　婦人謹愼論
一七、ティマイオス、ロクロス　世界精神及自然論
一八、ソーティヲーン　遺編
一九、モデラトス　遺編
二〇、プーテーロス　數論
二一、アレサロイカノス　人性論
二二、アリスタイオース　遺編
二三、カイキリオス
二四、ディドーモス　哲學系統論

二五、ディオドーロス
二六、オィルュリス
二七、ミローン　物性論
二八、スキュティノス　物性論
二九　オナトス　神論
三〇、アルク、マイオーン
三一、テアノス
三二、セクストス
三三、アルヒュトス　遺編

是等の書の或者は後世の僞造に出づ。且つピュタゴラス派に屬せざる者すらあり。然れども何れも短編にして一通り希臘文を知れるものには讀み易きの書なり。且つ下に羅甸文にて飜譯を附せり。希臘古代の哲學を研究するものに取りては唯一の資料たり。恰も唐土の玉函山房輯逸書の如き者なり。

フィロラオスの說はピュタゴラスに近しと稱せらるれども其或る者はフィロラオスの其人の言にあらずして後世の假託に出づ。ティマイオス、ロクロス、アルヒュースの如き、近世の研究に據れば皆僞作なり。オケロス、ロイカイノスの一切論もピュタゴラス一派の書にあらずと云ふ。是れ等は判然したるものなり。然れども斯く判斷し難きもの多し。

是に於てかピュタゴラスの說を見んとする者はアリストテレースを以て準的と爲す。然れども氏も亦以てピュタゴラス其人の說と爲さず。其學派の說とのみなすなり(アリストテレース形而上學)

次に易の經典如何と云ふに

一　上下經
二　十翼(彖、象、繫辭、文言、說卦、雜卦、序卦)
三　乾鑿度
四　諸儒の論註(易緯は之を除く)

一、二、三の三種に付て根本思想あり。技葉的後世的思想あり。先づ兩哲學の根本思